

法

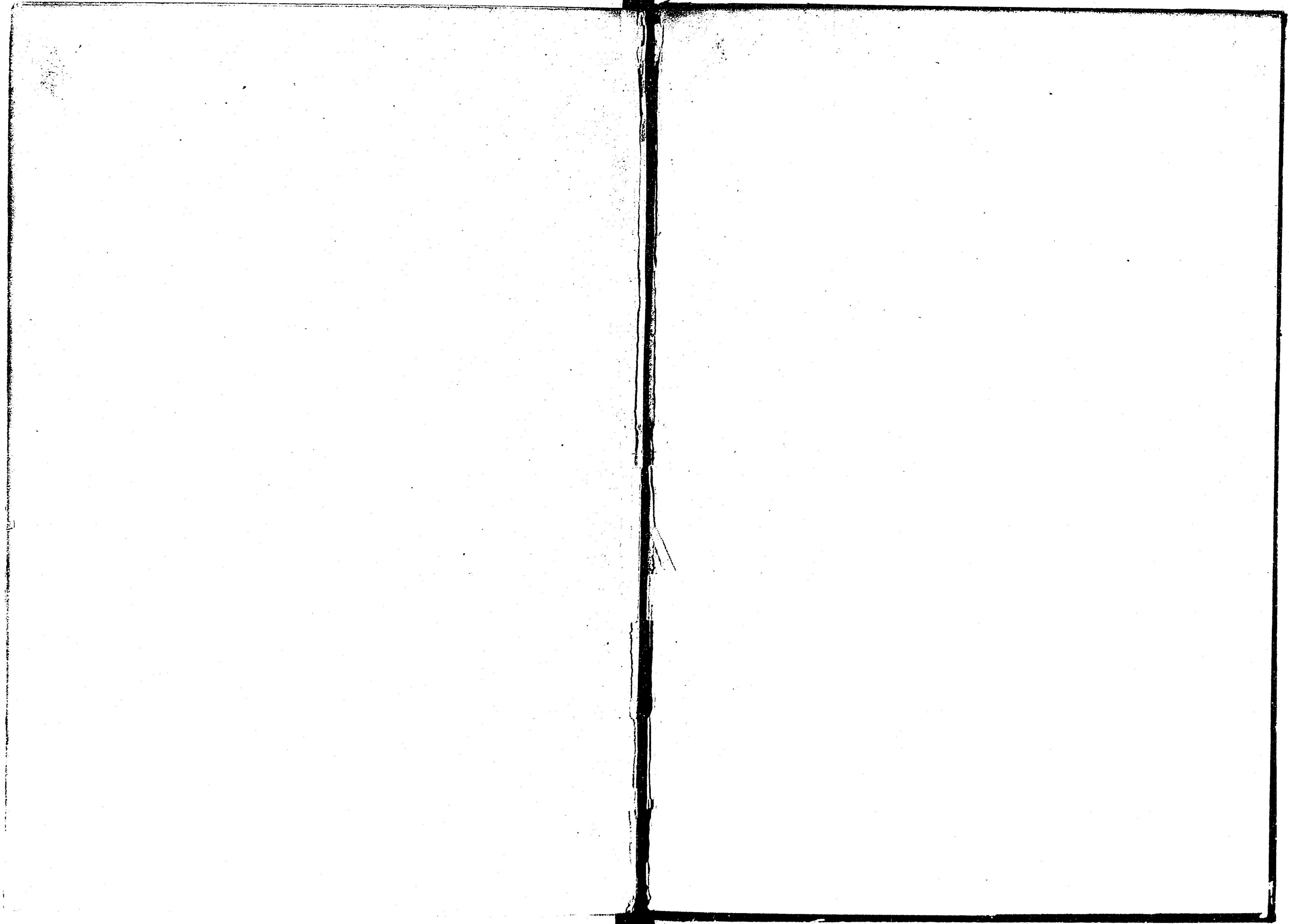
136

護國經現世篇卷之三

附

護國經現世篇卷之二

護國經現世篇卷之一



護國經現世篇卷之三

目次

法-136

溫故知新	第一	第一頁
濫擴妄張	第二	五頁
陸軍	第三	一一頁
海軍	第四	一四頁
經費節減	第五	一七頁
運輸交通	第六	二二頁
清國經營	第七	二五頁
課稅程度	第八	二九頁
政黨	第九	三三頁
言語文字	第十	三七頁
男女殊權	第十一	四二頁
士族華族	第十二	四五頁

附録 護國經現世篇卷之二

目次

擴張軍備第一、財權何在第二、中央銀行寂滅第三、財政方針第四、
增課租稅第五、公債第六、銀行第七、芟鋤繁縟第八、森川省第九、
虛飾第十、奢侈第十一、勤儉第十二、卷之二題詩

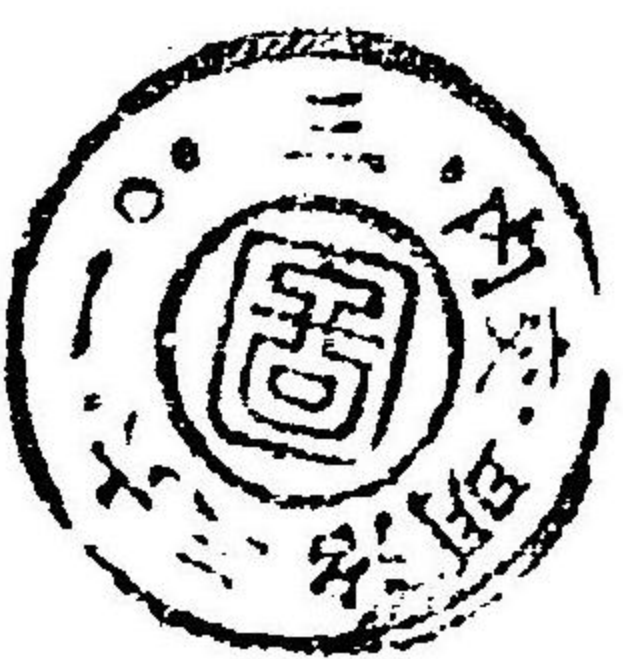
附録 護國經現世篇卷之一

目次

強國名實第一、二財團二財源第二、四惑第三、生靈利益第四、中央
銀行寂滅第五、義務眞象第六、輪廻妙用第七、發行院第八、銀行條
例第九、償金第十、租稅第十一、善惡第十二、卷之一小引

目次終

護國經現世篇卷之三の首に



戦勝の當時小生は我國情民力に應じて財政の方針を定めん事を
希ひ護國經現世篇卷の一を著し或る一派の排擠に中られて二十
八年の晩秋飄然金融社會を脱れ身を琴書の裡に委ねたり然れ共
尙軍備の濫擴妄張は財政を破壊し邦家に禍せん事を慮り三十年
九月重ねて卷の二を述べて豫め警戒を加へたるも更に其甲斐無
きのみならず清國拳匪の騷亂は益々國帑の濫費を助長し遂に國
家は疲勞し民人は困弊して慘愴なる悲境に沈淪せり殊に國帑濫
費の間には醜行惡習群り起つて弊害の横流する或は市政の紊亂
と成り或は官吏の汚行と成り其極子弟の師表と仰がる、教育家
の陸續として縲紲に罹るといふに至りては實に浩歎の外無きな
り近頃都鄙の間に憤起して之れが匡濟に任ぜんとする人士の出

るを見聞し小生も亦衷情默視し難きものあり本年首書を書き
三冬の嚴寒を冒して日夜全市を奔馳し諸彦推舉の光榮を荷ひ
議院の一員に加りたり元來黨派に縁故無き小生短期の議會に臨
みては片田舎より突然と都會に出たる趣ありて夢幻の間に議院
は早く閉られたり閉會の後燃るが如き炎熱と戦ひ此護國經現世
篇卷の三を著述せるは小生の觀察せる我邦の悲惨なる概況を推
舉せられたる諸彦を首め廣く世間に報道し且は之れを救醫する
大綱を布列して参考に供せんが爲なるのみ願くは路に當るの人
々は採るべきものあらば取り用ひて國を益し筆硯に親まるゝ人
々は論ずべきものを論じて教へられん事を爰に卷の二及び卷の
一をも併せて印刷に付し諸彦の足下に呈進す明治卅六年九月中
旬痴童學人三輪信次郎再拜謹書

護國經

現世篇卷之三

三輪信次郎著

溫故知新 第一

我邦は徳川氏覇權を握り鎖港二百餘年自から生産して自から衣食し以て
國家の安寧秩序を維持し來りしも人智の發達は氣運を催促し歐米の交通
を開かして封建階級制度の最早人心を統る能はざる事明白となりたれ
ば明治元年の御誓文は舊習を打破し萬民を保全するを以て政事の根基
と定め給へり此時に當りて岩倉、大久保、木戸、西郷の如き忠良の諸氏廟堂に
在り孜孜として綱紀を張り陋習を破り積弊を排除し以て四民平等の制度
を布きたるが爲めに民心維新して進取の氣象闔國に充滿せり爾來廿餘年
諸氏前後遠逝すも雖も其間に於て産業駸々として發達し海外諸國と對峙
して獨立するの國力を養ひ得たり而して藩閥の情弊漸く成り惡政從つて
行はれんとするや明治廿三年國會開けて志士正義を鳴し大に當路者を鞭
撻し民力の休養に傾意せしむ居る事四五年朝鮮に事あり遂に清國と交戦
し勝利を得たり然るも尙内損を免れざりしに由りて明治廿八年の末に「殖

二、
産交通及教育を奨励し國防は漸を以て完實を期し目下交戦の爲め缺損せるものを補充し並に自衛に必要な設備を爲さん」と勅せられ添ふるに大成を前途に期する旨を以てせられたり

聖慮遠大我邦の獨立を念とし國防は漸次に完實せん事を以て國民に臨み給へり人誰れか急進の榮達を希はざらん國家に於ても亦同じ然れ共順を追ひ序を踏んで進歩せざれば中途蹉跌の患あるが故に速成を希はずして大成を前途に期せられたるにあらざるや然るに當路者は國家百年の長計を惟はず國情民力の如何を審にせず苛税暴斂を逞じて頻りに民財を吸集し漫然武備の擴張に浪費したるが爲め約三十年發達し來りし殖産工業は輓近反りて萎靡振はず民力疲弊して不景氣の歎聲國中に徹底せり是に至りて政府も亦歲計の不足に苦むと雖も地租の復舊新税の徵收兩ながら行ひ難きを察し財政行政の整理を斷行し壹貳千萬圓の節減を企つるやの風説を聞くに及べり遅しと雖も今日に處し之れを外にしては妙策無し此際宜しく斷々乎として陸軍海軍其他に根本的大整理を決行し以て四五千萬圓を節減せよ是れを一家の經濟に視るも數年前一ヶ年壹千圓にて生活せし家族の聊か門戸を張り來りて今日三千圓を消費し家計の困難に逢着せる

が爲め二割を減じて貳千四百圓と爲し生活費一ヶ年壹萬圓の家族今日參萬圓を消費して困難に逢着し貳萬四千圓に減ずればさて必要な衣服飲食を廢し子弟の教育を止むるには至らざらん之れに由り推算する時は七八千萬圓より一躍して貳億五千萬圓に暴騰したる我邦の政費は民力休養の爲め貳億萬圓に削減するの餘地無きにあらざるべし
且此根本的大整理を爲すの責任は固より政府元老の二者共に之れを免る可からず何となれば新税を徵し舊租を増して莫大なる武備を濫擴妄張したるものは則ち今の政府元老なれば汝に出づるものは汝に歸るの金言に省りみ憤勵一番大整理を敢行して既往の罪科を購ひ以て國家の氣運を一洗すべし

況んや現政府の新に起れるや元老内閣の稱呼に比して少壯内閣と唱へられ必ずや積年の陋弊を打破し國家の面目を一新して治安の基礎を固め輿論の同情を買はんことを期待せし處なりしに執柄三年薄志弱行徒らに朝三暮四の政策を弄び少壯内閣たるより寧ろ巾幗内閣たるを表白せり且卅七年度の豫算を編成する重大の任務を眼前に控へ滿洲問題喧しくして人心恟恟たる時に當り陸軍大將兼總理大臣の大任双肩に掛るを思はず病痾に

托して葉山に優遊せる大臣を視たるが如きは實に言語同斷にあらずや又況んや今の所謂元老たるものは岩倉、大久保、諸氏の驥尾に附き犬馬の勞に服して知らず識らず諸氏の遺業を繼承し以て今日に到れる而已なるに聖上覆載の仁慈始隗購骨の古例に由り寵幸の優渥なるに恐懼して疾く至高踏勇退一身の光榮を全うする事を思はず益、權威に遣戀し、私黨を樹て私情に徇へ強ひて我邦自然の進運を沮害せんごす現政府の行爲の殆んど婦人の爲の如きものあるも此等元老が容喙掣肘の累多きに由るにあらずや果して然らば其國家に負ふ所の罪は眞に莫大なりと謂ふべし

既往は咎めず我邦の政費は貳億數千萬圓となりて茲に年あり今俄に之を貳億萬圓に減少するは固より容易の業にあらざるも斷乎ごして之を行はば鬼神も必らず是れに與せん況んや忠良無二の國民に於てをや抑ご我邦は五十年の昔香港灣を公開せる時に當り國家の獨立を以て唯一の目的として國際場裡に加はり爾來今日に至るまで甚しき外侮を受くる事無く所謂金甌を無缺に維持したれば今俄に過當の虛名を貪る事を敢てせず尙數十年を耐忍し益、國本を培養し内治を改良し前途悠々國家の大成を期すべきなり

濫擴妄張 第二

兵力暢發の爲に日に月に累進する國費の増加は其源泉に向ひ公共の幸福を脅迫するものあり人民の智力腕力生業資本は天賦自然の實用に反し其大分を擧げて其不生産的に滅盡せらるゝものあり幾億萬の巨費は恐るべき破壊の機械に消費せられ而も其機械たる科學の賜として最新最鋭と稱するも科學の範圍に更に一新發明あるに會へば明日は悉く無用の廢物に歸するのみ國民の耕作經濟の進歩富の生出等爲に進善を害せらるゝもの幾何ぞ是故に諸強大國の兵力にして益暢發すれば其政府の冀望する目的に益遠さかるものこれあるのみ

是故に日に戦具を集積し過度なる兵備を建有する列國に於ける經濟の危急は今日の所謂武裝的平和の名下に偶其人民をして相率るて崩壊せんとする危崖の下に赴かしむるのみ斯くの如き状態をして永く繼存せしめん乎恐惶は一般人類の思想を衝動し測る可からざる不幸を將來に來さんごす

爰に拔萃せる一章は有名なる露帝解兵の檄文を日南子より引來りたるも

のにして歐米各國が輓近の武備は我れ今年陸兵一師團を増せば彼又明年二師團を加へ我れ軍艦三萬噸を増せば彼又五萬噸を加へて甲乙相互に敵國に凌駕せんとし騎虎の勢を競成して其餘弊に苦悶する情況を窺知するに餘りあらん殷鑑在目我邦の如き維新の偉業尙未だ大成せざる中興の國に在りては其存立の歴史及び地形を利用し徐々として武備を完實するも決して晩きにあらざるなり然るに廿八年の戦勝狂熱は劇烈なる躁急病を惹起して軍備擴張の名目の下に幾億萬圓の國帑を浪費せしめたり今其一例を左に掲げ如何に其濫擴妄張の甚しかりしかを證明せん

『我邦の領土は數個の島嶼より成立して周圍皆海なるに拘らず古來要害に設備無く之れを人體に比すれば殆んど赤裸の如し一朝強國と隙あり四面より來襲を受けんか何に依りて能く之れを防禦せんや故に各地の要害に砲壘砦塞を築き以て不虞に應ずるの策を講ずるを急務とすは戦勝後顯官某が軍人の意を迎向し光彩燦爛たる大勳章を胸上に耀して各地に放談せし處にして諺に所謂狂者に人參を用ひし結果は明治廿九年度より卅六年度に至る八ヶ年間單に砲臺の建築而已に三千萬圓以上の巨額を消費せり試みに思へ凡そ人類は身體ありて之れを保持するに急なるものは食物

なり食足りて而して後衣服を欲し衣服備りて而して後居宅を思ふ居宅有り家道漸く富み穀肉布帛什器裝飾金銀珍寶を蓄積するに至りて火災盜竊の虞來る是に於て乎始めて邸宅の周圍に墻壁を築くの必要を生ずるなり今や我邦は宇内強國の一に加れり誇稱する者あるも生産の事業未だ幼稚の區域を脱せず従つて國民の富程尙低く是を一家に比すれば金銀什器は勿論布穀の貯蓄皆無にして僅に今日を糊口する者に似たり左れば領土の周圍に砲壘砦塞の備らざるは異常の事にあらず苛稅暴斂の實あらざりし明治廿八年に於てすら租稅滯納の處分を受けたる戸數拾萬に近かりし國情民力に於ては固より當然のことなり是れを之れ惟はず當局者は何の急ありて八年の間に三千餘萬圓を消耗せしか而して其築造せる砲壘砦塞は美は則ち美壯は則ち壯ならんも我國民の富程に視れば恰も傾斜せる數個の茅屋を圍繞して萬里の長城を築造せるの觀あり驕慢始皇の如き者又生ずる雖も之を經營するに躊躇せん然るに急劇に之を設備して周圍の要害既に堅固安全なるに似ず近日の外交手段は幾微の間にも是等の砲臺を應用する意思を顯さず優柔不斷他の專恣に逡巡するの痕跡を暴露し來れり嗚呼戦勝已來軍備の濫擴妄張は斯の如くして幾億萬圓の巨資を浪費し

國家の實力を消耗して自から今日の苦境に陥り、各國識者の嗤笑を招けり、左に砲臺建築費三千餘萬圓の内譯年表を掲げ、讀者の一考を煩はさんとする

明治二十九年	二百拾壹萬三千圓
同 三十年	四百六拾萬三千圓
同 三十一年	四百八拾三萬壹千圓
同 三十二年	四百三拾八萬四千圓
同 三十三年	五百五拾三萬四千圓
同 三十四年	五百七拾萬九千圓
同 三十五年	二百九拾二萬壹千圓
同 三十六年	壹百三拾五萬壹千圓

合計 三千百拾四萬六千圓也

尙東京日々新聞紙上の露國新聞を畧掲し以て磨玉の一石に充つ

海軍擴張と日露戰爭論

ノーウオエ、ウレミヤは五月廿四日の社説に『日本人の危険なる熱心』と題し論じて曰く

今や宇内の大勢海軍日進の運に會せり汝等益奮勵以て 朕が望に副は

んことを勉よこは是れ日本皇帝が神戸に於ける大觀艦式後淺間艦の宴會に於て宣はせられたるの勅語なり

日本臣民の熱心奮勵果して陛下の望に副ひたりタイムスの東京より得たる報道に依るに海軍擴張の新計畫として甲裝戰鬥艦三隻一等巡洋艦三隻二等巡洋艦二隻を製造するの豫定なり是の如く日本の議會は他の經費にて歳計の煩累を來たすに拘らず又概して財政上の狀況不況なるに拘はらず八隻の新軍艦を製造する協賛を與へたり此八隻の軍艦製造費は諸般の艦裝費を合して六千萬乃至七千萬圓を下らざるべく即ち日本經常歳入の約三分一を占む若し露國にして日本の擧に倣はゞ歳計を標準として軍艦製造費に六億萬留を支出せざるべからず噫

國防力擴張に對する斯かる國力不相當の經費は日本の財政機關を耗盡せざるを得ず今や日本は困難なる經濟的危機に遭遇し之より救脱するの途只陸海軍に對する不生産的經費を節約するに在るのみ然るに日本の政事家も日本人民自身も新聞紙に言ふ所果して其意見の反映なりとせんには此に思ひ至らず反て自國の海軍力擴張を名として喜んで新經費支出に協賛す

、、然れども國力なるものは獨り軍艦と軍隊の數のみを以て測らるゝものに非ず

苟も國力をして幻影的ならず鞏固たる基礎に立てしめんとせば國力を充實にし其勢力銳氣の餘裕をして滅盡する所なからしめんことを要す日の出の國に於ては此の眞理は尊信歸依者を得ず只益自國の戰鬥力の數を増加するに汲々として全力を傾注す然れども是れ果して何の爲めぞ如何なる戰爭を先見するにや

夫れ日露をして格闘するに至らしむる大危険は何處より起り來るか露國政府の平和政畧は我國より進取的行動を執るの舉に出でしめず然らば日本獨り自ら好機に乗じて露國を襲はんことを妄想を一掃すべきのみ然らば日本政府は直に軍備の經費を全く節減するを得ん

日本國民にして苟も自國の幸福を増進することを慮り目的もなく陸海軍を擴張するの非なるを悟らば日本の前途は疑もなく隆々盛々たらん只若し日本は滿々たる敵愾の氣風日本をして智慮の途に向て讓歩すること能はざらしめんには其の悲愴慘憺たる終を見んこと甚だ遠きに非ざるべし日本は戰爭をせず只陸海軍に其力に堪へざる經費を投ずる

のみにて自ら滅亡を招くのみ

陸軍 第三

近年は内閣代謝の時陸海軍の大臣は獨り止りて現職に在り從來の政策を墨守して殆んど新内閣に特立し專恣の行爲頗る多し蓋し此弊を創始せしものは實に憲政黨の内閣なりとす抑憲政黨の起つて内閣を引受くるや必ず先づ陸海軍を刷新し民力を休養して多年の言責を實際に施行し以て上下の信頼に應せんことは識者の屬望せし所なりしに惜ひ哉黨派權力の均衡に煩悶して國政を抛擲し數月ならずして瓦解したり爾後の内閣員は藩閥の徒與如何ぞ英斷の陸海軍に及ぶものあらんや是を以て年一年經常臨時の費額を増加し專恣の行爲益甚しく兵營の下より元帥府の上に至るまで一として虚飾誇張に流れざるもの無く弊習の多き蓋し諸官衙に冠たり一年志願兵なるものあり學歷其他の事情に由りて二年の兵役を減免せらる此志願兵は一年以内に兵卒の行動技術を修了して尙士官の職務を學習するの餘裕あり近年小中學の教育都鄙に浹洽して其結果は尋常の兵卒中此志願兵と同等の智識材幹を蓄ふる者亦多きは明白なれば苟くも當事者

にして精實に訓練の道を盡さば一年乃至二年以内に斯業を修了し歸休の許可を受け得べきもの蓋し過半に及ぶべきに漫然玉石を混同して概ね三年を徒過せしむ其弊や三年の熟兵は自暴自棄往々酒色に遊蕩し純良の新兵を誘ひて亦其惡習に情落せしめ天下の父母をして悲泣せしむるもの一年より多きを加ふ今若し從來の陋習を破り苛察嚴酷を以て能事せず尋常の兵卒を看る尙一年志願兵を見るが如く周到の注意を以て訓練に従事せば全數の三分の一は一年以内にして歸休を許し尙三分の一は二年以内に歸休を許すも軍隊の實力に於て毫も影響する處無き火を靚るよりも明ならん而して是れが爲めに二個の利益を生出すべし其一個は明治卅三年度糧食被服の兩費目のみに於て壹千百五拾五萬圓を支消せる決算表に由りて推算するに其三分の一即ち毎年大凡四百萬圓を節約し得る事にして今一個は毎年歸休を許さるゝ壯丁數萬人が各自生産的業務に従事し得る所のもの亦數百萬圓に上るべきなり一は直接に政費を減少し一は民産を増加し相合して國力を富ます蓋し算數以上の結果あらん

現今の下士制度亦其宜しきを得ず候補者漸次減少し定員を充すに艱む云へり其事由を聞けば下士は材幹群を拔と雖も制度の定むる所に因り將

官は勿論士官にも拔擢せらるゝ無きを以て終身下士に甘んせざる可からざる故なりと王侯相將豈に種あらんや此の如き固陋の制度は毫も國家に裨益無ければ速に改更して兵卒下士の出身者雖も識見伎倆に據りて士官に拔き將官に擢て其榮達の道を開くべし然る時は下士不足の憂根絶するのみならず尋常の兵卒も其榮達を希望して修技品行共に心を用ふるが爲めに其進歩を促して習熟の期間を早むるならん而して兵卒下士より榮進せる士官將官は固に兵卒の情偽を熟知するが故に軍人の社交を圓滑ならしめ従つて兵卒虐待の惡弊を掃除するの便宜を得ん

憲兵隊の如き地方幼年學校の如きは豈に重複的設備にあらずや警察の制度粗備れる今日にありて軍規にして徒法たらざる以上は不逞非違の徒は警察に委し取締らしめて足り武官の志望者は之を普通の中學生徒に採らば可ならん何等の必要ありて幼年學校憲兵隊を設置せし乎虚飾誇張畢竟は無用なる重複的設備と謂ふべし

其他微細に論究すれば有名無實の官銜を設け又は閑散なる官銜に専任者を置き斯くして老廢病餘の故人を養ひ公費を以て私恩を賣るの嫌あるもの鮮からざるに似たり夫の都督部と元帥府とは蓋し其壓卷の位地に立て

海軍 第四

本年四月神港の觀艦式を陪覽せしものは天氣清朗にして瑠璃を敷たらんが如き穩波の上に幾十隻の大艦小艇威儀を繕ひ正列して碇止せるを視て異口同音に其盛事を稱讚し相互に之を慶賀せざるものは無かりき前年清國海軍の第一位を占たる彼鎮遠の如きは噸數の順序に従ひ末列に在りたり儼然として外觀の勇壯なる英露客艦の將校も其侮り難きを感じたらん歟何となれば黃海の一戰能く寡少を以て衆多を敗り終に丁將軍をして醜を仰しめたるものは則ち此艦體が少年(六萬噸)時代の嬉戯にして今や壯年(廿萬噸)に屆りたれば我海軍の戰鬪力如何に増加せしかを想像し易きが故のみ

然るに事實に就きて之れを視るに我海軍の力量はいまだ壯年時代に屆らざるが如し戰勝已來七八年苛稅暴斂國力を消耗して以て艦噸の數は三數倍に増加せるも之れを指揮進退する海員は數年の教訓多歳の熟練を要すれば急劇なる船舶の増加は忽ち適當の海員に缺乏を生じ往々未熟若しく

は老朽者に過重の職務を課して其乗員に充てたる因果は靦面國民頻りに船舶の凶報を以て劫かざる八重山武藏の二艦が根室沖坐礁の如きは此記憶を新にするの近例なり既に常時の航行にして過失の斯の如く多きを思へば我海軍は船艦の數に於て壯年に達せるに拘らず之れを進退する乗員に追及せば尙青年にも屆らざるにあらずや今若し一朝敵艦と相見ることあらば周章狼狽して節度を過り何等の失態を演せん歟思念一回爰に至れば遠慮の士は對外硬者流に伍して開戰の主張に雷同するを憚らん財政困窮の現況は民産の源流邦家の血液たる鐵道電信の工事をさへ中絶するも尙海軍の第三期擴張は昨年議會に提出せられて多數の同意を得たるは戰勝狂熱の未だ全く醒ざるが爲め乎試みに思へ假令幾十萬噸の堅牢なる軍艦を常備するも海洋の險夷を暗んじ潮流の緩急に熟し我手足の如くに之れを發縱指揮する將校士官の員數にして缺乏ならんか恰も精神の宿らざる形骸に均しく寧ろ無用の長物たらん否徒らに國家を疲弊する害物たらん故に海軍今日の急務は宜しく艦數噸數の如き外觀的虚飾を後にして將校士官の養成に全力を注ぎ其大成を期すべきなり他日熟練なる乗員に過剩を生ずる時は國家の財政も亦餘裕を生ずる時ならん國力の發

達に伴ふて船艦を増加するは一擧手の勞のみ是時に至りて始めて名實の
 吻合せる勇武絶倫なる我海軍をして東洋の波上に光輝を耀せしむべし
 因に曰ふ左の表は本年八月の日々新聞より拔萃せり是に由るも人材の
 増加は船舶の増加に相伴ひ難きを證せんなり

我邦維新以來海運は日進月歩をなし以て今日に至りたるが今茲に廿
 五年以來船舶噸數の増加を見るに左表の如し

廿五年	二二四、八四九 ^噸	卅一年	六四八、三一四 ^噸
廿六年	二二五、二一八	卅二年	七九六、九三〇
廿七年	三二〇、三七八	卅三年	八六三、九三六
廿八年	三八六、一六三	卅四年	九一七、八七九
廿九年	四一七、六四三	卅五年	九三四、九六一
三十年	四八六、五〇九		

此噸數の増加と共に海員の數も著しく増加し甲種の免狀を有する者
 を數ふれば左の如し

廿五年	一、五四二 ^人	卅一年	一、五七六 ^人
廿六年	一、五九六	卅二年	一、六八〇
廿七年	一、六八〇	卅三年	一、七九九
廿八年	一、八一八	卅四年	二、〇四二
廿九年	二、〇〇一	卅五年	二、二三一

三十年

二、二三八

即ち廿七八年戦役の影響に依り三十年に至り二千人以上に達したる
 もの三十一年に及び俄かに減少して千六百人に下れり是れ外國海員
 の減退に基くものなり爾來内外人の比例は内國人の方増加するも外
 人は寧ろ減退の方なり

經費節減 第五

古は入を計りて出を制すと言ひ今は出を量りて入を製すと言ふ所は
 顛倒すれども其歸趣は古今同一にして共に國情を審察し民力の堪ゆる所
 を精査して政費の大本を定むるに過ぎず是則ち善政の根源なり苟くも之
 れに由らずして政務を料理せんか民心離反して國家立どころに危殆に陥
 るは理數の免れざる所なり我邦は維新草創の明治三年度に於て歳出の決
 算は其總額僅に貳千萬圓なり爾來三年當路者の献替其宜を得て七年度に
 於て萬機稍緒に就き國家の體裁新に備り始めて六千萬圓の歳出を視るに
 至れり其後肥薩の内訌等ありたるも幸に大勢に影響せず四民其堵に安じ
 生産の諸業着々として進歩し而して政府歳出の實數は漸次に増加せり

歳出決算毎十年略表

明治十三年度	六三、一四〇、八九六圓
同 廿三年度	八四、九〇三、六五〇圓
同 卅三年度	二九二、七五〇、〇五八圓
同 假設	一一四、一〇三、六五〇圓

此表を観察せよ十三年度の歳出六千三百萬圓は十ヶ年を経て貳千壹百萬圓に増加し二十三年度に至りて八千四百萬圓に上れり此増加額を平均に割當つれば毎年貳百拾萬圓宛の累加に當り二十三年度の歳出は之れを十年前に比して三割三步の増加を願みて該十ヶ年間我邦の情態を看よ四民は樸素にして各其正業に勤勉し目下の如き遊惰の風行れず華奢の俗尙れず收賄の事喧しからず姦詐の徒鮮かりし今にして之を追思すれば邦内健全無事の間駿々乎として國力の發展せるを證明せり此二十三年度已後の當路者維新當時の精神を失はず方正堅實の心を執り時の國情民力に鑑みて政務に従事せしならば歳出も亦前十年間の割合の如く漸次増加するも前表第四行假設の如く卅三年度の歳出は壹億壹千四百萬圓前後に止りて四民の苛税に艱み國力の疲困今日の如く甚しきに至らざりしは瞭然

たり試みに此壹億壹千四百萬圓を以て廿三年度の八千四百萬圓に對比すれば其増額は參千萬圓之れを廿四年度已後十ヶ年に割當つれば毎年三百萬圓宛歳出の累加するを見るなり我邦は東亞に僻在する島國なり且中興新進の人民なり毎年三百萬圓宛の政費を累加して善政を施行し順を追ひ序を踏み進取して懈怠する所無からんには他日の大成は掌を指すが如くに於て歐米列國の之を畏懼する蓋し豫想の外にありしならん惜ひ哉戰勝の狂熱政策は常軌の外に逸出して前表第三行の如く卅三年度の歳出を貳億九千萬圓の巨額に奔騰せしめ畢ぬ

其弊や獨り軍備擴張の下に陸海軍の競ふて國帑を浪費せしに止まらず苟くも官衙の名あるもの皆妄漫の支出を能事として忌憚無きに至りたり晚春の電報通信に年度支出を會計検査院と題する一章あり曰く

各本省及地方各官廳各軍隊等に於て年度末即ち三月に於て支拂ふ金額は殆んど例月の二倍以上に達し殊に旅費消耗品費の如きは三倍以上に達する奇觀あり右は何れの官廳に於ても年度末に至り豫算に剰餘を生じ國庫に返納する時は翌年度の豫算を減少せらるゝ恐あり且は豫算編成の確實ならざるを表白するものごなし剰餘あれば悉皆費消するが

例にて旅費の如きは事務視察の名義にて春遊を試みしむるか長官の覺目出度官吏は之を以て家計の一助に供するを常とせり甚しきは室内旅行にて旅費を丸儲とするものあり事務を曠廢し國費を濫用すること之より甚しきはなし消耗品に至りては不必要なる物品を多分に買入れ翌年度に持越し翌年度の消耗費を濫費又は流用するが例なり云々

是の如き惡例陋習は必ずしも廿三年度已後に始れるに非れば獨り現時の内閣のみ責を負ふべき謂れ無しと雖も之を救醫するは其至當の職務にして時機も亦甚恰好なり何となれば貳億九千貳百萬貫の重荷は國家の根幹を壓迫して其元氣を鬱結せしめられたれば民心政治の刷新を希ひ首を翹げて之を企待する折柄内閣は一員入りて四員去り而して現任者に將官多く陸海軍を改革するは今日最も便宜あり若し此兩軍の經費に大節減を加へ得ば文部農商務を全廢し府縣廳を合併し官業を淘汰し補助費を減殺し歳費を復舊し政費を貳億萬圓以内に遞減せん事流れに従つて舟を走らすが如くならん

支那三韓の有司が私擅に賦歛を重くし以て人民の怨嗟を買ひ猶且惡政を施して國家を恤まざるが如きは姑く論ぜずと雖も至仁なる君主を奉戴す

る我邦も亦之れに類すとせば明治元年の御誓文を如何せん祖先傳來の忠良なる國民も豈に終に當路者苛責の下に黙々として斃死せんや窮厄の極る所は遂に不祥なる變異を蕭牆の内に起すに至らん近年の内閣皆之れを察し財政の整理に着手して奏功せざりしものは積弊を截斷する勇氣を缺き一日の安を偷みしに坐するのみ人生百年の壽無し現内閣少壯と稱すと雖も既に知命を越ゆるの人加ふるに爵位勳功人臣の榮を極む今や千載一遇の好機宜しく激勵奮起して三十年來の積弊を截斷し財政を根本より整理し以て維新の良臣岩倉大久保諸氏以上の榮譽を荷ひ國民の謳歌場裡に明治廿七年の新春を迎ふる意無き歟

本項を脱藁せし際日本新聞紙上に齋藤修一郎君の談話を見て大に意思を強ふしたり爰に其一半を紹介す

目下政府の着手中なる行政整理なるものは其實唯政費を節減して歳出入を平衡せしむるに在るか將た大に不急無用のものを省きて大に有利有用のものに費やさんとするに在るか甚だ曖昧なり何となれば外に於ては清韓の經營内に於ては鐵道電話の如き事業に對して進取的計畫を爲すにも非ず而して時に或は新税を興すの風説を耳にすればなり吾輩

は深く此有様を遺憾とするに共に所謂整理の目的は大に不急無用のものを省きて大に有利有用のものに費やさんここに存せざれば國家の幸福にあらざることを信ずる者なり兔に角苟くも支出を節せんとならば克く其本末を審にし必ず其本に就て更革省畧する所なかる可からず吾輩を以て見れば從來政府の施設は過半形式に流れて實際に切ならざるものなり故に非常の決心を以て當れば克く改廢し得べきもの少からず即ち場合によりては四五千萬の節費又必ずしも望み難しとせざれど若し又形式的流行に變せず單に省局の合併人員の非免等其末に涉ることに彼是し居らんか一千六百萬の節略も決して容易ならざるべし而して吾輩は現内閣の技量如何を察しては素より前の勇斷を見るに困難なるべきを想へども多少共之に近かざる限り愈其効果は空乏なることを信せざる可からざるなり

運輸交通 第六

陸海軍を首とし根本的大整理を斷行し従前の政務を貳億萬圓以内の金額を以て支辨せば其結果酒造稅等一時の減收に控除するも尙數千萬圓の國

帑を剩し得べし此剩餘金の一半を擧げて運輸交通の機關即ち鐵道電信道路橋梁港灣埠頭の改良新設に従事すべし風説子は頻りに明年の豫算に於て鐵道電信既定工事の繰延を喧傳す果して此等の工事を繰延んか是即ち方今の民意に悖り國家の進運を阻遏するものなり何となれば有無を相通じ利益を交換し富源を開發し幸福を増進するに即功あるもの蓋し交通機關を以て第一とす今日に於て我邦の困弊を匡救するは武備にあらず外交にあらず唯一に内治の改良國本の培養に在り而して國本を培養し内治を改良せんには交通機關を整備するを以て最も急務と爲すが故なり歐米の富國其海陸山野到る所交通機關を普及するに視るも我邦目下の最大急務は獨り交通機關の擴充速成にあるのみ

且交通機關は軍人眼を以て之れを觀るも亦忽諸にすべきにあらず蓋し鐵道電信にして國內に普及し港灣埠頭にして完備せんか兵員武器を敏活に運搬し國家の緩急に應ずるを得べし殊に我邦の如き地勢狹長山脈連亘し一君主の治下にある島性の邦國にして交通機關完備する時は甲地の薄弱は乙地より補ひ丙地の急須は丁地より送り寡少の兵員能く數倍の敵軍に當るに難からず聞く西曆一千八百七十年の役獨逸の鐵道は十七日間に一

條の線路を以て兵員七萬六千馬匹貳萬貳千五百及各種の車輛貳千三百三十三を境上に運搬し他をして其神速に驚かしめたりと運輸交通の普及は又是れ一種の武備を擴張するものなり

顧みて我邦の實狀を觀れば鐵道は長足の進歩にして今や港灣に達するもの亦多しと雖も尙乗客貨物の上下に便捷なる埠頭其他の裝置備らずして海陸の連絡充分ならず殊に山陰北陸九州北海臺灣の諸道は幹線尙未だ全通せず恰も人體の四肢分立して血液の貫流せざるが如く國富の發達上非常の障礙たるや明白なり此故に天下の輿論は翕然として軍備の如き不生產的事業を次にし彼方面の經費を省きて生産的事業たる此方面に移し急速に鐵道の布設港灣の築造を完成せん事を主張して止まざるなり

然りと雖も運輸交通の機關を完成するに之れと相離るべからざる事業あり何ぞや道路橋梁鐵道を築造するに當りては勢ひ其沿道河川の排水に障礙を來し秋季至れば洪水氾濫して其築造物を破壊すべし豫じめ之れを救ふが爲めに森林を保護し河川を涵養し其根源に溯りて水流を修理するの事業を謂ふなり若し之れを等閑に附する時は假令一旦交通機關の完成を見るも永く其便益を享受する能はざらん本經第二卷第九に森川省なる一

官衙の創設を論せしは則ち之れが爲めのみ

清國經營 第七

大整理の結果國帑の剩餘金數千萬圓の一半を擧げて運輸交通森川保養の設備に當て残りの一半を提げて清國に臨み其經營に従事せよ苟くも一視同仁の心を懷きて我人民を庇護し彼人民を啓發せば四億の民衆は我生産の需要者となり其東洋の平和を保障して彼我を利益する事際限無かるべし然りと雖も其措置宜きを得ざれば勞多くして功寡く舊開拓使の覆轍を踐み臍を噬むの悔あらん依りて其着手に先ちて審案熟慮大體の方針を確定せん事最も緊要事件なり

明治廿九年已來五ヶ年の間に清國に於て專管の居留地を得たるもの北方天津牛莊より南方福州廈門まで所々に點在するに拘らず唯一天津のみ地域の區劃定りて家屋の建築を見るに至る露の旅順口獨の膠州灣英の威海衛の如き廣大の地を開拓し巨額の資金を放下して永遠の利益を期圖せる間に立ちて一葦の海水を隔つる我邦が其要求して獲得せるものをさへ經營せず依然として荒蕪に委ね狐狸の棲息に一任し我内政の艱難は之れを

省みるの暇無きを表白しながら滿洲の經營に向つて容喙するは啻に他の冷笑を招くのみならず或は藪蛇の累に罹らん是則ち淵に臨みて魚を羨むの愚よりも甚し如かず退きて網を結ぶの故智に倣ひ此等の居留地に移住して起業殖産せんとする邦人に運輸の便宜居宅の廉貸等の特許して其商工業の成立を補助獎勵すべし左れば此七八ヶ所數十百萬坪の居留地に店舗工場を築造し猶且定期航通を頻繁ならしむるが如きは清國經營初次の順序にあらざる歟

大凡領事の職務は被遣國商工業の隆替變遷より市民の風俗習慣の末に至るまで之れを知悉して本國に報告し又該地在住の邦民を保庇し彼我の事情を疏通するを主眼と爲すが故に領事の適否を定むるは先づ被遣國の國語を用ひて自由に會話を爲し得るや否やに在り其國語を解せざるものを領事に任ずるは盲啞を歌舞觀場に容るゝご一般殆んど徒事に囑すべし然るに我邦の清國領事を撰拔するや概ね藩閥の關係學閥の系統など區々の私情に出るの嫌ありて彼國語を解するもの多からず故に歐米より派遣せらるゝ領事に比し文字習慣に於て頗る同趣の利あるに拘らず反りて他の後塵を拜するの傾あるは眞に遺憾至極ならずや我邦偏狹なりと雖も忠君

愛國の志士にして清語を會得するもの豈に五人拾人に乏しからんや宜しく此等の志士を羅致し相當の年俸を給し豊裕の交際費を與へて以て各地の領事館に居らしめ彼我の事情を疏通して先づ清民の安心を買ひ而して後其信賴を得せしめよ現時清國は政綱弛廢して租稅徵發の方法備らず地方の高官は隨意に之れを増減するの實況あるに由り清民は財産隱蔽の手段に心勞し而して之れを活用し之れを増殖するの暇あらずご謂へり此際我邦より殖産に經驗ある者混入し好領事ありて親切に其間を周旋する處あらば彼我の資本勞力を以て安全の起業を計畫し其成功を視る事蓋し容易ならんごす

佐藤虎次郎氏は群馬縣の代議士なり自著支那啓發論を寄贈せらる立論着實就中日英清三國の資を合して亞細亞銀行を設立し而して清國政府の機關銀行に當てんごするが如き支那開發に志あるものは先づ自ら支那化せよご勸告し而して孔孟教の復興を慫慂するが如き多岐に涉らず一技一能を以て直進し衆庶を誨諭せんよりは寧ろ朱門權家の信望を得るに務むべしご論ぜらるゝが如き地歩を淺近の處に占めて高遠の期望を畫けるものなり清國の經營には確に一種の好指南車たり

或は曰ふ清國の事業を獎勵するも邦人は元來生を嶋嶼の内に稟けて先天的嶋人根性を有し國內にのみ跼蹐して一葦の海外と雖も飛躍の氣概を存せざれば奏功の望甚鮮しと是れ邦人を誤認するものにあらずや凡そ慕郷の思念は人類の通情にして外に良好の目的無く内に苦痛を感せざれば泛泛として移居せざるは常理なり夫の北米連邦の祖先が敢て父母の國を去り無人の地に至りて苦楚を嘗めたるも信仰の自由を逼害せられたればなり故に若し内外の情勢に於て移居の守内に優る事明瞭なるを感ずれば邦人の如きは寧ろ相率ゐて海外に雄飛するの時來らん看よ上古 神皇の征討は邦人の移居的特性を暗示するのみならず中古源義經は陸奥に東下して自死せりとは史の記する處なれ共義經の豪邁なる兄に代りて平氏を討ずるに於てすら怒濤と險阻とに避易せざりしもの彼れ壯年鬱勃の氣象を懷き何の顧慮する處ありて空しく輿隅に蟄死するをせんや其亞細亞の北邊を攻略して東歐に進撃せし事跡は識者の同感する處なり又豊太閤は部將に與ふるに我邦の土地に限ありて其洪量を發揮するに足らざるを憂ひ朝鮮を攻伐せしは更に著しき事跡なり山田某の暹羅征服に與れる錢屋某の海嶋貿易に従へる是等は皆我邦人の國內にありて志を得ざる處あれば

進んで海外に向ふの特性を具へし徵證にあらずや目下醜業婦の徒海外に跋扈して到る處に其勢力を逞するは固より忌むべきものなるも邦人に移居的特性の存する事を明示するものなり去れば清國に移住するが如きは言ふに足らず他日邦内實業開發の餘地無きに至り坐して現存の人口を支ふる能はざる時到らば其溢るゝ處のものは必らず五大洲中を往來して安樂淨土を自營すべし嶋人根性云々は蓋し是れ誤謬の陋見ならん

課税程度 第八

故きを温ねて新を知り近年我邦の政費が無上に濫擴妄張せしを明にするに至りて殊に陸軍海軍が其實力を養はず寧ろ虚飾的外觀を誇張するの傾あるを議し國家の現状に鑑みて従前の政費に大節減を加へ其剩餘金を以て運輸交通の機關を急速に完成し併せて森林河川を保養するは焦眉の急務なるを略論し進んで前年來の係累たる清國の經營も今日之れを中廢すれば先勞を水泡にするのみならず我商工業の好得意として前途最大の希望ある四億の民衆と親睦和合の時機を逸し異文異習慣の歐米に專占せらるゝ虞あり故に剩餘金の殘額を擧げて之れを專管居留地の開拓と其交

通を輕便ならしむるが爲めに使用せん事を勸告し温故知新第一より清國經營第七を脱稿せり然るに内閣は徒與をして整理鉅案對外硬を呼號せしめ一は府縣廢合鐵道工事繰延等に反對の輿論を喚起し一は人民の敵愾義憤に慫へて同情を買ひ結局行政財政の整理を中止するのみならず清韓經營の好題目を掲げて砂糖税若くは煙草官業の類に由り新に尙一層民間の餘資を誅求せんことと是れ昨今新紙上の風説なり現内閣も亦于愚男兒の集合豈に斯の如き狡猾の舉動を以て行政財政整理の大責任を遁れん事を敢てせんや然りと雖も課税に關して本末を誤り此上に増課すべからざる時に於て増課税其者の既に非なるに留意せず新税の選擇を議するが如き者多々なるを以て茲に其迷想を破却せんことす

抑租税を徵收するは國家の存立上に止むべからず而して之れを負擔するは亦人民の義務に屬すと雖も重課の弊は人民を貧弱にし終に國家を滅亡せしむ今明治廿七八年則ち戰勝前我邦重要物産の生出高を最近調査濟なる明治卅三四年の生出高に比較すれば

第一表	廿七年	七、八八三千貫	米	四一、八五九千石	一九、八二二千石	合計	六九、五六四
	廿八年	八、六九八千貫		三九、九六〇千石	一九、五三七千石		六八、一九五

卅三年	七、六四三千貫	四一、四六六千石	二〇、三九一千石	六九、四〇〇
卅四年	七、〇〇二千貫	四六、九一四千石	二〇、六二九千石	七四、五四五

生絲	廿七年	一、八七、五貫	廿八年	二、三九、六貫	合計	卅三年	卅四年	合計
						四、二七、三三	二、四四、五五	二、四七、二三
								四、二七、二三

織物價格	石	炭	石	油	合	計
廿七年	六四、〇五八千圓	四、二六八千噸	一五二千石	六八、四七七		
廿八年	八五、〇八三千圓	四、七七二千噸	一四九千石	八九、九五四		
卅二年	一五六、四五六千圓	六、七二二千噸	四七四千石	一六三、六六〇		
卅三年	一五九、一一千圓	七、四二九千噸	七六七千石	一六七、三〇七		

第一表第二表に於ては聊か増加し第三表に於ては倍額の増加を見る價格の差分量の違、品類の異なる等純正なる比較表にあらずと雖も尙之れに由りて我邦國運の發達と民産の増加との程度を想見するに難からず第一表のみを本として立算すれば一割餘第二表のみを本として立算すれば二割弱第三表のみを本として立算すれば一倍餘而して三表を合して立算すれば六七割の發達増加を推定するを得べく而して課税も亦此六七割の増加に準據して程度を定むるに於ては國家も亦漸次繁榮に赴くは自然の趨勢なりしものを然るに政費は明治廿七八年に於て單に八千四百萬圓に過ぎざりしに輓近は此金額に六七割を加へたる壹億四千萬圓の程度を越

越して貳億萬圓乃至參億萬圓卅三年歳出決算總額貳億九千二百七拾五萬五拾八圓の巨額に迫る。畢竟之を負擔する國民は富程を増加する六七割なるに拘らず暴に三倍以上の政費を重課し了りたるものなり。目下國家の疲弊せる民衆の凋殘せるは現實に課税過重の苦患を證明して餘りあり左れは今日は民力休養の爲めに寧ろ租税の減免を講究すべき時期に在りて決して新税の徴收に懸念する時機にあらざるなり。否斷じて將來徴收すべき新税の有無其性質の好悪其徴收の便否等を調査する時機にあらざるなり。更に思へ現今拾餘萬の壯丁は三年兵役の義務に屈服し公費の負擔既に三倍以上なるに尙地方税町村税其他強制的の寄附金救助金等苦痛の上に苦痛を加ふるもの層一層増加して止まず壹千萬衆の戸主は何の處にか父母を扶養し妻子を撫育するの餘資を得んや嗚呼現行の課税額は適當の程度を逸脱する既に遠し京阪等都會の一部住民が衣食住の華美に赴けるを知りて直に我邦は既に富めりと速斷する勿れ生絲石炭等交易運搬の衝に當れる新開の地方に多少の富戸が勃興せるを見て直に我邦は確に富めりと速斷する勿れ山陬僻地の藜藿皮根を食せし細民米飯を雜へ砂糖を舐るを耳して直に我邦は大に富めりと速斷する勿れ藜藿に米糖を雜るは僅に禽

獸を脱して人類の境界に入れるもの新開の地方に多少富戸の生來せるは其區域の物價俄に騰貴せるに由るものにして其數僅少之を五千萬の同胞に視れば只蒼海の一粟のみ而も乍にして起り乍にして仆るもの多く擧げて言ふに足らず都會に於て華美衣食するもの往々之れあるは概ね戦後軍備等の官業紛起せるに際し奇利を墾斷したる所謂御用商人の徒賄賂行使の便宜を兼ね一時の榮華を誇示するに化せられて輕薄者流が負債に負債を重ね表面の體裁を繕ふ弊風の増長せるなり此等皮相の外觀に泥まず窮巷僻遠多數細民の状態が如何に慘憺たるかを視察せば我邦家の治道に益ある遙に西洋文明國を巡遊するに勝るや萬々なり敢て内閣諸氏に勸告す晚秋清涼の氣に乗じ草鞋を踐みて内地の山川を跋涉し來れ

政黨 第九

政友會は十八議會に於て其所屬の代議士百八拾餘名と稱して乃ち事實の過半数黨たりし故に議場に於ては其爲さんと欲する處は爲し得べかりしに何事をも爲さずして止みぬ思ふに是れは議會開會の前より内部に動搖ありしに因れるにあらずや果して六七月の交は貳三十名の退會脱會者あ

りて傳ふるに至れり今や總裁の代謝あり何等か發展の道を求めて衰運を
 挽回せん事は幹部の所願たるべきも到底其目的を達せざらん蓋其樞要の
 地に在るものは概ね徳操なく才幹無く膽力無く識見無く碌々乎として只
 總裁の活動を待つあるのみ然るに新總裁は病餘の貴公子豈自ら挺身して
 事を擧ぐるの勇氣あらんや早晩瓦解滅亡に終るならん嗚呼憲政有終の美
 を唱へて勃興せる一大政黨としては其末路眞に憐愍の情に堪へざるなり
 憲政本黨は代議士の數僅に八拾餘人なりと雖も十八議會の當初政友會の
 眞情を看取し自ら自黨の主張を明にして公々然無所屬其他に交渉せば或
 は議場に勝を制する望無きに非りしも左顧右眄時機を失し剩へ否決の殆
 んど分明なる上奏案を提出するが如き銜名の策略を取りたるは遺憾なり
 しは當時某代議士の論評なりし其總理氏の逆境に立ちて之を統率し久
 くして倦色なきは政界の異彩其偉人たるは論なしと雖も本黨幹部正實の
 士に乏しく往々奇譎の策畧を弄びて時世に阿諛し節操ある黨與を失ひた
 るは正に蹉跎の因を爲し以て今日に凌夷せり頃日黨内不統一の謗を聞く
 もの是亦其末路に近きたるにあらずや

中正俱樂部は匆卒の際三拾餘名の代議士を罹致したりと雖も意思の同じ

からざるもの數多ありて固より一時の集合に過ぎざれば十九議會に至り
 て尙其名實を存續し得るや否や

新潟同志會は健在すと雖も其數拾名に過ぎず政友俱樂部は既に分散した
 り而して帝政黨なるものは殘骸のみ

其餘幾十名の代議士は所謂無所屬にして各自孤獨其人格持説異趣百端始
 より統一する所なし某氏其議院内控室を目するに人類館を以てす是れ大
 阪博覽會向前の未開人種を列置せる觀場に擬するなり又政友會員の控室
 を動物園と稱せり是れ其盲從(猛獸)を諷するものか共に善謔として當時の
 笑柄に上りたり

自由黨の再興は如何抑舊自由黨なるものは矯々たる志士の憲法政治を實
 行して藩閥の私擅を抑制せんが爲めに天下に呼號せしに起りて暫くは藩
 閥者流を煩悶せしめたるも爾來三十年轆軻不遇の間賢者多くは簞を易へ
 従つて威望漸く衰へ時運に推移せられて黨情大に變遷したり遂に本來の
 主張を拋棄し仇讎たる政府に屈し對手たる進歩黨に合し金玉は瓦礫に土
 氣は商風に退化して蹙起困頓の極當年の氣魄は一掃して痕をも止めず終
 に政友會裡に埋没して二三衰耄の形骸を存するのみ斯の廢物を利用して

再興を企つるは稍奇異の現象なりしに七八月の交に至りて一派中立議員の企畫せる新政黨組織の別働本體なりしを事實上に發見せり
一派中立議員の新政黨組織は政友會の動搖憲政本黨の不和全く治らざる時機に投じ事を擧げたれども前途は實に茫漠たり如何となれば之れに奔走するの徒を觀るに重なるものは政友會の落武者帝國黨の因縁兒にして他は言ふに足らざるが故に權家に吸引せられ利窩に誘惑せらるゝの嫌あるを慮りて有識の士は之れに向つて去就を明にするもの鮮く唯從來野心家漁利客の目あるもの進んで入黨するの形跡あれば蠅の臭に集り蟻の甘に群るが如く假令一時は數十名の團結を作成するに至るも一朝自己に利なきを見れば則ち脱し去るならん左れば十九議會に於ては有力なる新政黨は尙見る事を得ざるならん

然りと雖も有識の士は既成政黨の惡弊醜習を詳悉し之を厭ひて其打破に務むること同時に純正なる政黨の新に興りて儼然として政府を督勵するに非ざれば國家を富強ならしむる能はざるを覺悟し相會すれば輒ち政黨建設の談話ありて氣運の一轉する近きに在るが如く其聲甚高からざるも東南西北到る處に呼應するの情慨あり天若し我邦に幸せば血を流すの慘事

を見ること無く安靜温和の手段に由りて早晚完全なる立憲政體の運用を觀るに至るべき乎

議會閉ちて後に興れるものは同志集會所と議員集會所とにして共に芝區内に在り一は舊自由黨趣味の人を主とし所謂新政黨の幹部とて頻りに奔走中と聞けり他に出入する者は中正俱樂部及び無所屬の人多く而して誰彼を論せず去就隨意其名の如く極めて平安なる代議士の集會所なり

言語文字 第十

我邦現今の文章を觀るに漢文あり和文あり最も廣く行はるゝは漢字假名雜り文にしてまゝ假名のみ文も見ゆ近頃は往々歐文を弄するものも出來りて新紙に英文欄を設けて顧客を吸引するに至れり又文字は平假名片假名萬葉假名漢字眞行草隸歐字なり尙之を補ふに？！等の符號を挿入する者あり斯の如き錯雜至極の文字文章を日常に使用する邦國は世界の廣き他に類例の無き所なり左れば既に之に馴れたる成年者は左のみ苦痛を感せざるも我最愛の幼兒等にかゝる文字文章を修學せしめ世事次第に繁雜を加ふる文明世界を渡らしめんとする事は甚以て不仁不慈の業な

りこは遠慮ある父兄の通情として感ぜざる所ならん。書籍の刊行を業とする者の訴ふる處は前段に述ぶるが如き錯雜至極の文字を多く貯へ之を排列し之を撮拾し之を植置するの困難勞苦は殆んど忍び難く之が爲めに大に我邦文化の進運を阻害するといふにありて學者文人皆同情を表せり故に數年前歐米の文物を洞觀して歸朝せし某新聞の記者は其紙上に數日の間快筆を揮ふて彼地新聞の迅速輕便に刊行せらるゝ事を稱賛し其要點を僅に廿四字なる羅馬字の功に歸し終に我邦文化の發達に就ても文字を改良するの急なる事を論じたり

先憂の士あり曾て『假名の會』なるものを興して其會員は自己の姓名を始めとし森羅萬象を悉皆平假名にて書了せんと企てたり之に唱和するの輩ありて此處彼處に假名の門札散見せられしも斯の如き遲鈍の事業は上古結繩の時代に繼げばいざ知らず今世の希望に適せざれば數年を待たずして廢れたり相踵て興れる者は『羅馬字會』なりき其主張は羅馬字廿四個を以て鐵道停車場地名札の如く百般の事物を綴り合せんとするものにて結局『假名の會』四十八の平假名を廿四の羅馬字に半減して一層簡易に文字文章を作爲せんと欲したるに似たり然るに母音五字の外他の四拾餘字は

何れも二三字を連合せざれば其音を發する能はざるに由りて平假名より簡易にするの目的も實際に臨み反りて繁雜なりければ當時の發企者は好位地の學者或は名望家の集合にて其氣焰一時熾盛なりしに拘らず久しからずして世の忘るゝ處となれり

然れども書籍の刊者が愁訴と慈仁の父兄が感情とは日に月に識者の胸臆に蟠屈して終に政府は國語改良の調査を當世の所謂先覺者に囑托するに到れり而して官民目下の意向を察するに議論多岐其間氷炭の異見無きに非ざるも大要は使用漢字の員數に制限を加へ傍ら多畫の漢字を減畫し之れに假名を加へて一種の明快なる假名交り文體を創出し之を我邦普通の文字文章と定めんと欲するが如し他日研究幾年の後此新文體出現せば是れ正に我邦の文字文章に一進歩を與ふる者たる固より論なしと雖も此新文體を從來の文章に比較して其差異多からざるときは改良の利益極めて薄からん之れに反して若し其差違甚だ多く一見して改良の實益を納得ずるが如き嶄新のものならんか之れを全國に普及せんとせば非常の困難四方に涌出し一世(三十年)を経るも實行せられず其間に勞多功少の議論を生じ中途廢絶の悲運に陥る憂あらん

然らば則ち國語改良或は文字文章變更の事業は終に望み難きものなるか
 何んぞ其れ然らん假名の會先づ躓き羅馬字の會尋で倒れたるは共に同一
 種の病根を抱擁したるが故なり病根とは何ぞや此二會は我邦固有の言語
 文字の性質を講究せず偶爾祖先の遺物之を保存するは人類の當務なりこ
 頑信せしに坐するなり今日の國語改良(漢字制限等)の新調査の官民の心力
 一致せるに拘らず亦前段に述ぶる如く中廢の憂を免れずとする所以も同
 じき病患に罹ればなり苟も國語改良の如き偉大の事業を成就せんには先
 づ其眼界を高所に着けて我邦固有の言語文字は果して文化の開發に連鑑
 して進歩するの性質を具備するや否やを講究せざる可らず幸に『假名の會』
 の躓き羅馬字會の倒れたる前蹤に鑑れば我言語文字は如何に改良に考案
 を盡すも好望の無き事を證明して餘師あらん左れば後世子孫の爲めに好
 箇健全の言語文字を遺さんご欲せば遺憾なながら我邦現存の言語文字に
 拘泥せず廣く宇宙の間に探求を試むべし。

輓近學者論客の間に漸次『國民主義』信孚せられ其說多く宇内近時の形跡
 に符合するの餘勢は我邦の如きも國政は勿論文學技藝言語の末に至るま
 で悉く其固有物を保存せざる可からずとの議論を往々耳にするに至る然

れ共進んで大觀すれば此等の論説は僧侶を愛して袈裟に及ぼす者なるを
 知るべし假りに双眸を他方に轉せよ昔時の五十三次十有五泊の東海道駕
 籠旅行を廢して一晝夜の汽車に依るは舊俗の新習に若かざるが故にあら
 ずや若し弓箭は我邦の武器なれば米佛の砲銃を採るは國民主義を侵すな
 り木造布帆は我邦の戰船なれば英獨の鐵艦雷艇を擇むは國民主義を犯す
 なりと言はゞ誰か狂愚を笑はざらんや是れに由りて之れを觀よ獨り言語
 のみ我が陳腐を棄てゝ之れを他邦に取ればとて我日本の國民主義に何の
 影響か之れあらんや況んや建國以來盛に他邦の言語文字を移して漸次我
 に融合混用し來りたれば今日現用の言語文章も寧ろ我邦固有のものにあ
 らずと言ふを得可ければなり

今や誠に國語改良の實を擧げんご欲せば斷乎ごして從來の言語文字を全
 廢し宇内に現存する最良の言語文字を撰擇し移して以て我邦に採用する
 の最も時宜に適中なるを覺悟するを要す爰に宇内現存の言語文字を通讀
 するに最も多く文明の國の國語に採用せられ最も廣く商業の社會に通用
 せらるゝものは英語なり故に我邦は宜く英語を擇み之れを取りて國語ご
 爲すべし此英語は簡易明快なるが爲め文化の開發に伴ひて次第に繁雜を

加ふる現世に在りて最も適應のものなる事は識者の普く知る所なれば反對の議論は最も尠からん而して之れを採用する順序等に至りては次卷に公示する時有るべし

男女殊權 第十一

慶應明治の初より西洋の學術文藝接踵して舶來せる際に男女同權なるもの亦我邦に侵入し東洋諸國は婦女を苛使虐待して天然の性情を毀損し不幸の生涯を送らしむ是れ其國民が野蠻蒙昧の境界を脱せず男尊女卑の習慣行るゝ故なり速に此醜風俗を打破し婦人の權利を回復し男子と同等ならしめよと所謂灰殻の徒は勿論曲學阿世の學者に至るまで新聞に雜誌に喋々として之れを論説し大に世の思潮を惑亂せしめたり近年に至り其弊毒に罹る者頗る多く主婦は家宅の内に在りて家事を齊整し兒孫を教養し良人をして内顧の患無く全力を外部に伸張せしめ内外呼應して一家の幸福を維持せず相競ふて慈善會矯風會等の交際の場所を創設し離合集散歲月を徒過し女性特有の溫柔婉淑なる性情舉作を消磨し去り傲然として妻女は良人を抑壓し女學生は男學生を威嚇し以て所謂男女同權なりとし一

種の陋心ある男子其虚に乗じて之れを助長せし結果は漸く家庭の違亂を醸し來れり終には高尚優美なる我邦の風俗を破壊せんごす豈に寒心すべきにあらずや

人類の始めて世に生ずるや陰陽の氣に感じて男女の兩性に分る蓋し男は陽性剛徳を備へ女は陰性柔徳を備ふ其身體に就て比較せよ男子は長高雄偉にして女子は豐腴婉媚男子は筋骨逞しく膂力に富み女子は肌膚軟にして姿態艶なり男子は鬚髯の威に由りて衆に臨み女子は泌乳の仁を以て兒を懷づく男子の音聲は粗大にして勇壯なれども優美ならず女子の音聲は細銳にして優美なれども勇壯ならず故に誕生數日の幼兒と雖も少しく其容貌啼聲等に注意すれば男女を識別する甚難からず況んや成長の後は同種の服飾を纏はしむるも其男たること女たることは一見にして知り易し外貌身體既に同一ならず而して性情精神も亦差違あり男子は剛強廣濶にして女子は柔順綿密なり男子は意志強く女子は情に濃かに男子は遠く慮り女子は近く感ず男子は大體を看取するに長じ女子は局部の觀察に敏なるにあらずや

斯の如く男性と女性とは身體性情精神の三者共に差違長短あり従つて二

者天賦の職業も亦同一なる能はざるが故に相悖らず相侵さず各其本分の天職に就きて人類社會の組織を完成すべし蓋し男子は陽剛なるもの自から廣且大なる外部に出で、勤勞し以て社會公共の事業を營み女子は陰柔なれば常に狹且細なる家内を守りて老幼を撫育し固滿なる家庭を作り各其本分を盡すべく然らざれば天地陰陽の理に合し人間生活の幸福を享受する事難からん

男子は身體精神の剛強を以て外を務むるに適し女子は之れに反して内を治むるに長ず其天分の職業既に殊異なり其權利の殊異なるも亦知るべきのみ男權主となりて女權客たる時あり又女權主となりて男權客たる時あり主は客に譲り客は主に譲る交譲の間琴瑟調和して平等に無量無邊の福利を得べし左れば男女の權利は殊異なり雖も其間に尊卑無く多少無く上下無く廣狹無し只同一ならざるのみ惟同一なる能はざるのみ

我邦古來の風俗は概ね以上説き來れる所の理論に合して男子の女子に接する苛虐の行爲無し雖も女子の男子に對する貞淑柔順を專とする美風あるを瞥見して男尊女卑の蠻風行はると誤察せる如きは觀光旅次の外人に在りては亦止むを得ざるものならん歐米固より文化先進の邦多し雖

も其習俗悉く美なる能はず理論悉く善なる能はず邦人たるものは其好悪良否を精察玩味して而して後取捨其宜に出でざる可からず彼の男女同權論は天理に違ひ人情に悖り頗る危險なるものゝ如し我邦の家庭を違亂し國家を蠱毒する深く且厚きに至らざるに先ちて速かに撲滅せざるべからず

士族華族 第十二

昨年の夏頃なりき某新聞に士族の稱呼の廢すべきを説きて曰へり『我邦に士族の稱呼あるが爲めに全國中各區役所等にて此二字を記載する事毎一日數十萬回而して之れを區別する爲めに平民の二字を記載する事亦毎一日數百萬回十日之れを繰返し百日之れを繰返し一ヶ年三百六十有五日其時間を消し筆墨紙を費し腕筋を勞し袖縁を耗す蓋し幾億幾千萬回之れに五年十年の歲月を加乗すれば億兆の數も盡す能はざらんと富士の土塊に起り石狩の涓滴より成るを觀るごきは顧みて悚然たるもの無きにあらずや士族の稱呼國家の治安に益ある乎』族の稱呼士族其れ自身に補ある乎士族の稱ありて勇壯を増すにあらず才智を加ふるにあらず身を富貴にせ

ず家を尊榮にせず士族其れ自身に補ひ無く亦國家の治安に益無し斯の如き無用の長物の爲めに年々歳々億兆未盡の勞力と物品とを浪費するは痴呆の爲にあらずんば殆んぞ狂人の業と謂ふべし繁文縟禮征討軍の先鋒として速に士族の稱呼を廢し亦平民の二字を戸籍面より省略せん乎

就て思ふ華族の稱呼も亦之れに類するにあらざる乎我邦の華族は明治二年六月官武一途上下協同の聖旨に基き從來の公卿諸侯の稱に替へたるに始まり後十五年を経て五等の爵位加れり當時の詔勅に曰く

朕惟フニ華族勳胄ハ國ノ瞻望ナリ宜シク授クルニ榮爵ヲ以テシ用テ寵光ヲ示スヘシ文武諸臣中興ノ偉業ヲ翼賛シ國ニ大勞アル者宜シク均シク優列ニ陞シ用テ殊典ヲ昭ニスヘシ茲ニ五爵ヲ叙テ其有禮ヲ秩ス卿等益爾ノ忠貞ヲ篤クシ爾ノ子孫ヲシテ世々其美ヲ濟サシメヨ

聖意優渥至仁至大なり華族たるもの此詔勅を奉體し四民瞻望の地位にあるを三省し政治に文學に或は工藝殖産に模範的好事例を開始して衆庶を指導すべきに反りて時勢の遷移に後れ好尚の變化に伴ふ能はず飽食暖衣逸居自ら樂むの風あるは眞に浩歎の至ならずや

華族の内情を詳察するに寒心すべきもの亦多し其財産豊富にして他の檢

束を受ざるものは奢侈贅澤に耽り淫靡遊惰に陥り甚しきは花柳の巷に其面目を汚すものを生じ又財産の缺乏なるものは位階勳等に相當なる體面を維持せんが爲めに支出は常に収入に超過し遺練算段の結果は債鬼の苛責に堪へざる者あり財政の困艱家政の紊亂破綻百出禮遇の禁止停止も尙足らず刑罪獄裡の人となるものあり瞻望の地位より斯の如き者を出だすに至りては習俗の日に月に浮華輕薄に流るゝ亦己むを得ざるなり又華族は特別の榮譽と權利とを有して自然に他と疎隔する傾あるに由りて小民困苦の聲其耳に達せず窘窮の狀其目に映せず四圍の事物其聰明を掩ひ自己あるを知りて他あるを知らず平生願使する處の令扶は唯命之れ従ひ其逆鱗に觸れんことを恐る是故に壓制的の行動に馴れ倨傲の風に長じ易し又子弟の教育に於ても學習院華族女學校なる特別學校を撰み上下疏通の道を杜絶し人世に困難の境遇ある事を知らしめざるが故に奮勵の氣象起るに由なく苦學修業の何たるを解せざるなり少壯の華族中有爲の人物少きは主として之れに坐するもの乎此の如くにして殊に皇室の藩

屏となり四民の模範となり得べきや
畢竟武門武士と言ひ公卿諸侯と言ひ華族士族と言ひ皆之れ無用の階級の

み武門武士の稱呼廢せられて社會一段の進歩を爲し公卿諸侯の稱呼廢せ
られて又社會一段の進歩を爲せり今に於て華族士族の稱呼を廢せよ官武
一途上下協同なる聖旨の功德一層擴充して社會は更に一段の進歩を見る
べし

護國經現世篇卷之三終

明治三十年九月印刷頒布

護國經現世篇 卷之二

護國經現世篇卷之二

目次

擴張軍備 第一……………一頁

財權何在 第二……………二頁

中央銀行寂滅 第三……………三頁

財政方針 第四……………六頁

增課租稅 第五……………七頁

公債 第六……………九頁

銀行 第七……………一〇頁

芟鋤繁縟 第八……………一一頁

森川省 第九……………一三頁

虛飾 第十……………一四頁

奢侈 第十一……………一五頁

勤儉 第十二……………一五頁

卷之二題詩

目次終

護國經

現世篇卷之二 三輪信次郎著

軍備の擴張 第一

戦後の經營として軍備擴張の方針を立て昨年度より年々平均二千九百萬圓を以て十三師團の陸軍を養ひ二億三千萬圓を以て二十萬噸の軍艦を造り一千五百萬圓を以て之を維持せんとするの計畫に着手す是れ果して國力に相應するものなるや

歐洲大陸の諸國は境域犬牙の如く相接り動もすれば事端を隣邦と開くの虞あり且歴史上の仇怨凝結して解けざるが故に相互に軍備を増加するの誠に己むを得ざるなり我邦は四面環海一種の武陵桃源たり唯列國競争の餘を受け東洋亦多事ならんとするの今日軍務商業の上より觀察すれば多少海軍を擴張するは亦己むを得ざるが如し故に若干萬噸の軍艦を造り幾百萬圓を以て之を維持するの計畫は國民固より異議無からん陸軍の擴張に至りては其意を得ざるもの殊に多し抑十三師團の新設は如何假に當局者の説明を信じて其兵員を必要なりとせよ師團の數を減ずるも夥多の費額を節して同數の兵員を養ひ得る道あるに非ずや又都督部の設置は如何大將巨多にして之に與ふるの位地に窮せし因果に非ずや又憲兵隊を各市に新置し

以て内務警察の一部を割取せしが如き又東京以外に數個の地方幼年學校を創設し以て文部教育の範圍に侵入せしが如き皆是れ目下の急須にあらす此等の爲めに陸軍を濫擴張し此勢に乗じて進行せんか潰兵の禍は久しからずして興らん哉

海軍の擴張と雖も亦然り苟も取捨其宜きを得ざれば徒に無用の費額を増加するのみにして實力の強大を期すべからず寧ろ商船の制度を整頓して大に之れに力を盡すべからず惑者動もすれば世界列國の強弱を比較するに甲國は軍艦何隻噸數幾許乙國は軍艦何隻噸數幾許故に乙は以て甲に敵し難しと曰ふ焉ぞ知らん海軍の強弱は獨り軍艦及び其噸數の多寡にあらずして寧ろ商船の員數噸數如何にあるを商船なるものは平時は海運を司とりて國力發達の要具たるは勿論戰時に當りて或は病院船運送船となし或は報知船巡洋船に應用し舉措進退常に戰艦に隨伴す苟も此補助勿らんか軍艦ありと雖も其用を爲す能はず中古和蘭商船制度に依て覇權を揮ひ近代英國は之を用ひて以て威を全洋に恣にす是れ宜しく我邦の模倣すべき所なり故に海軍の擴張は此類例に依りて策立し以て力を商船事業の振興に盡すべし果して然らば軍艦及び其噸數増加の如きは今日の豫定を半減するも其實力に於ては徑庭なからん

謹んで第九議會の初め下し給へる 詔勅を觀よ曰く「國防ハ會テ漸ヲ以テ完實ヲ期セリ今交戰ノ爲メ缺損セルモ

ノヲ補充シ並ニ自衛ニ必要ナル設備ヲ爲サントス」と
聖意炳として日月の如し夫れ國防の準備は漸を以て完備
を期すべきのみ交戦の缺損を補充し自衛に必須なる設備
は戦前の歳入に償金を加入せば大に新税を徴收せざるも
之を爲すに難からず如何ぞ我邦の地位形勢を以て漫に曠
地の犬牙する歐洲列國の皮相に倣ひ新税を征し公債を募
り之を軍備の濫張に投ずるを爲さんや蓋し國家の消
長は當該財政の如何に係る國防軍備の隆替亦素より此則
に洩るゝを得ず先年より内帑の金數十萬を分賜せらるゝ
ものは撫民の仁恕即ち國本の培養を先んせらるゝに外な
らず然るに今や我邦の歳計は收支相償はず國債の如きは
既に民力を凌がんとするを願はず復た更に之を増募し
以て無謀に膨脹せる歳出の不足を補はんとするは獨り
聖意に悖るのみならず國防の軍備も完からざるに先ちて
民力既に枯涸を告げん乎赫々たる日本帝國も土耳其伊太
利の状態に沈淪するに至らん嗟呼所謂軍備擴張の好文字
是れ宛然一個の伏魔殿のみ先づ此伏魔殿を破壊せざれば
百事廢せん

財權は何れに在る 第二

財權は右兵權は左兩者雙手に在りて首腦に歸一し始めて
操縦自在なり維新の後
天皇躬から文武を總攬し給ひ各般の主務分置せられて行
政の機關既に備はる然り而して兵事と財務とは實に其主

要に居る所謂兵權は茲に論せず財權は今何れの所に存す
る乎更に詳言せん大藏省は數百の大小吏員を使役し數萬
の國帑を費し而して其爲す所果して如何故川田日本銀行
總裁會て數客を會して謂て曰く今の大藏省は唯國債の利
息を勘定するの外底事を爲し了せず凡百の金融政策總
て乃公を之れ俟つのみと言倨傲に似たりと雖も事實は之
を證明するを奈何せん

大藏省をして今日の狀態に陥らしめたるものは何ぞや惑
者曰ふ是れ畢竟大藏近來の當路者財務運轉の能力無きに
坐するものなりと皮相より觀ば則ち然るが如し然れど
も其眞因は財務運轉の能力の有無にあらずして寧ろ財務
運轉の機關其者を失へるに厓胎す明治の十六年政府自ら
紙幣發行の特權を日本銀行なる一私立會社に附與し以て
自ら財政事務の改良を得たりと信じ在昔今日の無勢力を
招きしに外ならず頃日本銀行は貸附金利を引上げた
之に先ちて三菱が其所有の株券數百萬を市場に私賣する
や現任總裁は其職任を濫用せりと攻撃の聲都鄙に喧傳
せり總裁自から此の如き拙策を行ひたりとは膚淺の見た
るを免れずと雖も此事實に依て經濟社會に疑懼の念を起
さしめ金融を障碍したるや明なり而して大藏省は唯之を
傍觀するのみ本年三月衆議院議員某々が同志の間に公に
せる「財政機關刷新の意見」中日本銀行の勢力偏重せる
所以を説いて頗る肯綮に中るものあり藉り來りて左に掲
げん

我邦宣戰ノ大權ハ實ニ

天皇ノ獨リ綜攬シ給フ所ナリト雖モ軍費ノ事ハ先ツ營
利ヲ以テ本業トセル日本銀行ノ總裁ニ就キ自己ノ利益
ヲ顧ミス報効ヲ謀ルヤ義務ヲ盡スヤ如何ト問フノ上ナ
ラデハタトヘ人馬肥ヘ兵器銳ク將校勇ナルモ強暴ナル
外國ニ對シ疾ニ機先ヲ制シテ彼ノ不備ヲ電撃シ勝利ヲ
逞フスル事能ハサラン志士仁人タルモノ一念爰ニ至ラ
ハ如何ノ感慨カ懷裏ニ迸生シ來ルヤ若シ國家ノ大計ヲ
舉クルニ先チテ一個私人タル日本銀行ノ總裁ノ情意ヲ
問ハサル可ラストセハ日本國民タルモノ其忠愛ノ特性
ヨリシテ遺憾焉ヨリ大ナルモノハ莫カラシテヤ堂々
タル帝國四千萬衆ヲ代表スル日本ノ政府トシテ邦家ノ
危機ニ臨ミ制ヲ一私立會社ノ頭人ニ受ケサルヲ得スト
セハ其危キ事實ニ累卵不啻ナリ豈一日ト雖安閑トシテ
其事ヲ抛擲スルニ忍ンヤ(下略)

夫レ宣戰構和ノ大權ハ我立憲帝國ノ面目ヲ維持シ元氣
ヲ發揚スル一大樞要ノ公權ニシテ
天皇ノ外須臾モ之レニ觸ルモノアルヲ許スヘカラス
然ルニ此邦家ノ榮辱成敗ヲ賭スル和戰ノ時機ニ當リ堂
堂々タル帝國トシテ制ヲ一私立會社ノ頭人ニ受ルカ如
キハ日本國民ノ斷シテ堪フル能ハサル所ナリ吾人ハ更
ニ日本銀行カ實業界ニ向ツテ如何ナル關聯ヲ有スルカ
ヲ問ハント欲ス

(前略)嗚呼我同胞四千萬ノ命脈ハ實ニ我邦ノ實業ニ繫

ケリ此實業ニ必須ナル金融ノ根源ヲ一私立會社ニ委テ
テ運用ヲ其頭人カ情意ノ發作ニ托スルハ千鈞ノ重量ヲ
一髮ニ懸ルヨリモ危シ一朝經濟界ノ恐慌ニ遭ヘ、世ノ
實業家カ日本銀行ノ鼻息ヲ窺ヒ一舉一動備々焉トシテ
爲ス所ヲ知ラサルハ最近既往ノ實況ニ徴シテ諦視セラ
ル、所ニアラスヤ(下略)

(前略)我邦ノ政事ハ既ニ立憲制ニ改マリ四民平等之レ
ヲ翼賛スルニ拘ラス奇怪ニモ遺憾ニモ獨リ財政ノ機關
ノミハ專制的ナル昔ノ姿ニ組織セラレテ之レカ爲メニ
國家ノ元氣ヲ發揮スル彈機ト民間ノ實業ヲ扶掖スル膏
血タル金融ノ大根本ヲ舉ケテ一私立會社ニ委託セルニ
依リ自ラ危急亡亂ノ大患ニ陥ラントスルモノナリ

此論や日本銀行と大藏省との位置を説明するに餘り區
々の情誼に泥みて斷乎たる改正を行はざれば財政の前途
誠に言ふに忍びざるものあらん今の時に當りて大藏省を
して今後眞に其實力を揮はしめんと欲せば先づ財權の所
在を明かにせざる可らず之を明かにせんと欲せば日本銀
行が壟斷する紙幣發行の特權を政府に回收するより急な
るはなし嗟呼淵藪の爲めに魚爵を驅るものは獮豸なり帝
國の爲めに財權を驅るものは紙幣發行の特典乎

中央銀行の寂滅 第三

日本銀行が兌換券發行の特權に由りて享浴する洪大無邊
の利益は國家の公權より生ずる全國生靈の共有物にして

一私立會社の私有すべきものに非ざる事及び此理由を以て自民政の第一手段として該特權を政府に回收すべき事は昨年八月本報第一卷に於て詳論せし所なり昨年三月日本銀行は日本銀行特權と任務の比較と題する小冊子を發行す此書に素と同行の課稅法案に對し反駁防禦の爲めに刊行せしものに係ると雖も特權より生ずる利益を時態して長へに之を保有せんと欲する意向に蔽はんと欲して資本能はるを引證して一段の興味を添へん彼れ小冊子は固へり日本銀行が紙幣發行の特權より獲る所の純利益は左の如しと

一金八千五百萬圓 保證準備發行制限高
 内
 金二千二百萬圓 政府貸上高
 金一千九百六十一萬六千二百七十四圓
 銀行紙幣ノ消却ヲ俟テ發行スヘキ高
 金一千萬圓 外國手形割引ニ充ツル高
 差引
 金三千三百三十八萬三千七百二十六圓
 普通ノ貸借及ヒ割引等ノ運用ニ充ツヘキ高
 又引
 金二千六十一萬三千七百二十六圓
 前金額ノ内庫内ニ徒積スル平均高

日本銀行ハ兌換券發行ノ特權ニ依リ得ル所ノ純益ハ實ニ二萬九千九百十二圓餘ナリ而シテ之ニ酬ユルカ爲メ政府及ヒ社會ニ對シテ負擔スル所ノ任務果シテ如何左ニ項ヲ別テ之ヲ列記セン

一金庫事務取扱ヲ負擔ス 一公債事務取扱ヲ負擔ス 一紙幣交換事務取扱ヲ負擔ス 一銀行紙幣消却ノ取扱ニ任ス 一大藏省供託有價證券ノ保管及ヒ出納ノ取扱ニ任ス 一大藏省預金運用ノ取扱ニ任ス 一國庫金配布ノ事務取扱ニ任ス 一日本銀行金利ハ常ニ市場ノ金總ヲ助ク 一日本銀行ノ金利ヲ變更スルニハ大藏大臣ノ認可ヲ受ク 一貨幣拂渡證書ノ割引ヲ爲ス 一右ノ外自行ノ利益ヲ抛テ國家ノ爲メニ盡サ、ル可カラサルコトアリ

以上舉クル所ノ兌換券發行特權ヨリ得ル利益ト之ニ對シテ負擔スル任務トハ孰レモ實際上ニ就キ調査スル所ニシテ敢テ誣ユヘキニ非ス即チ日本銀行ハ特權上ヨリ生スル二萬九千九百十二圓餘ノ利益ヲ受クルカ爲メ之ニ對シテ前記數項ノ任務ヲ負擔スルモノニシテ其輕重ハ蓋シ之ヲ判スルニ難カラサラン

右に掲げたる日本銀行兌換券發行特權の利益計算の虛構なるは瞭然として日月の如し何となれば一方に於て明治二十三年以來外國手形割引に充つる高一千萬圓なりと明言するに拘はらず之を他方に於て七百萬圓と算定するに非ずや果して平均七百萬圓なりとせば忽ち三百萬圓の餘

此殘額
 金二千二百七十七萬圓 實際運用高
 故ニ
 金百三十六萬六千二百圓餘

金十四萬圓 利子六分トシテノ利益金
 橫濱正金銀行外國手形割引平均
 高七百萬圓ヨリ生スル利益

合計
 金百五十萬六千二百圓餘
 兌換券發行特權ヨリ生スル利益

内
 一金二十萬圓 國庫金取扱損失
 一金二十萬圓 兌換券取扱費
 一金百七萬七千八百八十八圓
 二十九年二月末所有公債證書二
 千六百九十二萬七千二百八圓ニ
 對スル利益金ノ差損高

小計
 金百四十七萬七千八百八十八圓
 特權ニ對スル直接ノ損失
 差引
 金二萬九千九百十二圓 兌換券發行特權ヨリ生スル純
 益金
 小冊は更に之に附記して曰ク

金を生ず此金を七八分に貸附くるも廿一萬乃至廿四萬圓の利益あり又一方に於て自家所有金二千六百餘萬圓を全然九分に貸附得るものと算定し百七萬餘圓の差損を出すに準ずれば他方に於て庫内に徒積する一千六十一萬餘圓も貸出を爲さんと欲するも得べからずと通辭せず同じく九分に運用すると計せば更に九十五萬餘圓の利益を生ずるなり此二利益を併せ二萬九千九百十二圓に加ふれば實に一百三十二萬圓の利益を生ずるなり是れは實に中央に巨大の純益を生ずる事なり而して斯の如く虛構の計算を公刊し天日高き欺かんとす其狡猾猥惡なる人而シテ、語を以て之を計するも尙ほ足らざるを覺ゆるなり然れども政治上の便宜を以て姑らく日本銀行の謬言を毎一年の純益 實に二萬九千九百十二圓なりと認定して爾來は毎年金三萬圓補助を日本銀行に附與する事に定め金庫事務取扱以下の諸義務(金利變更の一項を除く)を悉く之に負擔せしめ速に兌換券の發行權を回收すべし殊に又國庫金の取扱以下は金員を左手に入れて之を右手に出す迄の期間無利息にて之を運轉し得るの餘地あれば某々議員の所説の如く日本銀行は欣んで此恩命を奉ずるならん若し或は之を辭退せん乎二十三十萬圓の手續料を掛けて後任の銀行を募らば蒸々として立せらるゝ數多の大銀行は相競ふて該取扱の命を奉せんことを希ひ其極手續料を辭するも其命に應せんとする

者出んも知る可らず是に至りて經濟社會を益毒する所謂中央銀行は忽焉として寂滅し金融の輪廻妙用を觀ることを得ん

財政の方針 第四

我邦目下の財政は如何の方針を取れる乎昨年十月内閣は地方官を會して爲政の方針を宣言す財政に關するもの左の如し

財政ノ整理ハ政府ノ最モ困難トスル所ナリ之カ整理ヲ圖ルニハ專ラ國力ニ應シ以テ現今ノ形勢ニ適スルノ策ヲ定メ出入ノ平均ヲ保ツコトヲ務メ一方ニ於テハ國家經濟上ノ擴張發達ヲシテ國勢ノ進運ニ後ル、コナカラシメンコトヲ期ス

是れ實に常道なり内閣は果して之を實行するや熟ら財政の現狀を觀て之が將來を察すれば轉た寒心に堪へざるものあり所謂軍備は濫擴張せらるゝの勢成り新設の租税は苛重にして公平を缺き外資の輸入に急なるや公債を外賣して許多の内損を醸せりと願れば明治二十八年度に於て租税増納處分を受けしもの各府縣を通じ九十九萬三千餘名此金額大約八十二萬六千圓一名の家族を五人とせば大約二百萬人即ち每人金十六錢餘なり嗚呼我邦良民の一割二分は現に十六錢の租税に堪へざるに至れり然るに當路者は此等の事態を恤まず漫に苛税を聚斂して憚る所無きものゝ如し況んや此税金中より一二の營利團體に巨

現狀より觀れば地租の二分五厘は寧ろ輕きに失するなり今之を増課するは三新税を興すと其難易何れぞや地租條例を見よ地租は土地臺帳記名者より徵收すと即ち地主に賦課するものなり又地租賦課の標準は之を地價に取れり地價は收穫の中より諸費を引去り之を市場の利子歩合に比較して算立す今や全國の物價騰貴し米價亦之れに伴ふが爲めに地主の利益從つて多きを加へたり益多くして税加はる之れ理の當然なり誰か亦支吾するものあらん惑者曰ふ地租を増率するは或は可ならん唯其結果として小地主漸次減少して大農兼併の弊興り遂に社會の基礎を危ふするに至らんと是れ杞憂のみ我邦の地租は既に數百年來の成立に係り加ふるに専ら長子相続の制度行はれて小農の多き世界に冠たり況んや今日の地租税率は之を改租以前に比すれば非常の減輕なるを以て多少の増加は復舊に近づくものなるに於てをや英國の地租は歲入の僅に一分一厘に當る而も小農甚だ尠し我邦は一割五分五厘なり而して小農の別に少なきを加ふるを聞かざれば地租の多寡は大農小農の増減に關係する事蓋し鮮し然らば則ち本卷第二第三に依りて兌換券發行の特權を回收し毎年數百萬圓の歳入を増加すと雖も本經第一卷に詳論せるが如く此數百萬圓の用途は別に確定せしが故に已むを得ずんば酒税及び地租を増加して歳入の不足を補充すべし次章之を詳論せん

額を分附して以て或は生絲の輸出を獎勵す或は製茶の販路を擴張すと稱す此の如くにして尙ほ財政の方針に當りての宣言に背馳せずと云ふ乎嗚呼誠に國力に應じて財政を整理するの心あらば先づ軍備の濫擴張を杜絶し新設の租税を廢止すべし

租税の廢止を案するに明治八年幕府稅制の煩雜を整理し從來の税目殆んど一千六百種を減削して四十二種となし尋で地租條例を改正し又地價の修正を行ひ其他の改善も少ならず爾來地租酒税及び海關稅の三種は重要な稅源となり七八千萬圓を徵收して國運漸く富強に向へり今や突然政府の歲計豫算は數倍して三億萬圓と稱するは何ぞや是に於てか營業稅登錄稅及び葉煙草專賣收入の三種を新に重要稅源に加へたり此等の新設稅は皆性質不良なるのみならず殊に營業登錄の兩稅は其負擔の歸着たどへ資本を奪はざるも直に收益を奪ふに至るや論なきなり寧ろ増税を必要とするに於ては事業の發達に妨害少なき消費稅即ち酒税を撰むべし二三千萬圓の増收は敢て能し難きにあらざらん

然れども稅源は敢て消費稅に限るべきに非ず直稅開稅の利害論に拘泥して國情を省察せざるが如きは是れ庸儒の見のみ若し稅法簡潔にして徵費多からず負擔公平なるに於ては直稅に依るも亦可なり我邦の地租は則ち此類而已抑も地租輕減は政黨派の綱領に上れる舊題なりと雖も今日に至りては此論を主張するもの甚だ稀なり經濟界の

租税の増課 第五

租税の負擔は憲法上素より國民の義務に屬すと雖も漫りに之を重課すれば良民困弊し國力の衰退之れに従ふ是故に古來賢哲の政柄を執るや苛税を除くを以て爲政の根本と爲せり然りと雖も國家の維持に必須なる時は之を増課する事亦已むを得ざるなり是に於て乎民情の趨勢を利用して之れに従事する事亦爲政治家の機略にあり曾て聞く英國が所得稅を新設するや國を擧げて對佛の軍備に熱中せる時を以てせりと我邦は干戈を收めて既に二年租税増課の時機を經過したり然れども戰役前の歳入は役後の歳出に當るに足らざれば酒税地租を適宜の程度に増課すべし之れ誠に已むを得ざるなり(附錄第二卷第十一租税參照)

一、現行酒造石税一石金七圓を改めて年度十月より三月迄に製造する酒類は石税九圓とし四月より九月迄に製造する酒類は石税十圓とし又濁酒の石税を七圓とす

蓋し四月以降製造する酒類は夏期を經過し品質良醇にして價格を昇し易し故に十圓の負擔は冬期製の九圓に比して重からずとす是れ兩者を區別する所以なり

二、自家用料酒の製造を禁止す

蓋し酒税の増率と自家用料酒の免許とは兩立し難し從來之を嚴禁せざりしは婦人の仁のみ若し情實

に拘泥して之を敢てせんば到底酒税に由りて歳入増加の目的を達す可し

或者言はん自家用料酒の免許を嚴禁するは細民を苦ましむる去りて之を實際に徴せよ自家用料酒造者の八割は地主以上にして小作人は僅に二割を過ぎず自製者毎村五指を屈するに止まるのみ而も其多くは耕地を所有して衣食に窮するものにあらずるに似たり是れ當然のみ他人の土地を借耕し以て一家敷口を糊する細民は豈能く自家用料酒を醸造するの餘裕あらんや

此法を施行するの結果は之を舊法及び現行法に基く歳入に比較計算すれば左の如し

舊酒税法に依り得たる國庫收入額

酒造石高 四百廿五萬七千五百九十三石 (明治廿九年度豫算に依る)

此税額(金四石) 金一千七百〇三萬〇三百七十二圓 (同上)

自家用料酒鑑札料 金七十九萬〇〇三十二圓

合計 金一千七百八十二萬〇四百〇四圓

現行酒造法に依り得る國庫收入額

酒造石高 四百廿五萬七千五百九十三石 (前年度に同一なりと假定す) 此税額(金七石) 金二千九百八十萬三千五百一十一圓

自家用料酒鑑札料 金七十九萬〇〇三十二圓 (前年

度に同一なりと假定す)

合計 金三千〇五十九萬三千八百八十三圓

立案に依り得らるべき國庫收入額

酒造石高 四百廿五萬七千五百九十三石 (前年度に同一なりと假定す)

自家用料酒禁止のため増加高 二百萬石 (但し濁酒)

内

濁酒 二百萬石 金千四百萬圓

冬期に屬する清酒 百七十五萬石 金五千七百七十五萬圓

夏期に屬する清酒 二百五十萬石 金二千五百萬圓

合計 金五千四百七十五萬圓

此改正税率は主として酒造税法の第一種に屬するもの所謂釀造酒に就て云ふの、其他の各種も亦此割合に従て改正すれば大約三千萬圓を増收する事容易なり歳入の増加三千萬圓にして尙未だ足らざるに於ては宜しく地租に據るべきなり一昨年本經の第一卷を公刊し地租の増率を説くや之を難するもの尠からず甚しきは以て亂階たらんと極論せり然るに輿論漸く移りて今や地租増課の聲遠近に響應す政府部内亦此議ありて石代を引上げ税率を引下げんとすと其税率引下げの結果は地租に於て三百四十餘萬圓を減少すと雖も石代を八九圓に増定して地租を算出する時は歳入は千五百萬圓を増加す云々と此方案の如く體面を粉飾するが爲めに新に煩累を醸さんよりは寧ろ現制

の下に税率を昇して同一の効果を收むべし斯く酒税を改正して三千萬圓を得地租を増課して亦幾千萬圓を得ば以て交戦の缺損を補充し自衛の必須に備へ實業の發達を補助するに於て綽々として餘地あらん何ぞ登録税を用ひん何ぞ葉煙草專賣法を取らん又何ぞ營業税を採らんや之を要するに今に於て急に租税の徵收方針を改正し國務の骨髓たる財源の不足を酒税及び地租に仰ぎて三新税は全廢すべし斷じて之を行は、鬼神も避くと苟も公正の心意を持して之を決行せんか忠良なる日本の國民は皆同情を表するに躊躇せざらん

公債 第六

公債なるものは國情已むを得ざる場合の外募集せざるを最上策となす國情已むを得ざる場合とは何ぞや必需の經費の急なるに當り増税に據る事能はざる時其一なり時勢の進運に従ひて高利の公債を交換する時其二なり公利洪益の事業にして獨り政府の施設に待つものあり而も他に財源なき時其三なり此三時を除きて公債を募集するは大に不可なり整理公債本年五月の發行に由りて内國の高利公債は全く償還を了りて五分利附のみとなれり今未償還高の種額及び金額を示さん (本年五月末日現在)

金銀公債(五分利附)

二九、八二三、三二〇

海軍公債

九、二八八、六〇〇

整理公債

一七四、五六四、二五〇

軍事公債

一一一、七二四、〇〇〇

鐵道公債

一〇、〇〇〇、〇〇〇

事業公債

三、〇〇〇、〇〇〇

合計

三四八、四〇〇、一七〇

其他無利息内國債は

舊公債

五、四八六、三六二、五〇〇

紙幣消却元資借入金

二二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇

合計

二七、四八六、三六二、五〇〇

外に七分利附外國債二十三萬三千七百五十二圓あり今これを總計すれば三億七千六百十二萬〇二百八十四圓五十二錢となる加之擴張軍備の結果として募集する公債は二〇億八百五十一萬二千五百圓あり此内明治三十一年度の終りに尙八千五百〇一萬二千六百四十五圓の清國債金の計算に於ける殘額を差引く時は一億二千三百四十九萬九千八百五十八圓にして此額は實に明治四十一年度までに募集すべきものなりとす之を現在の總額に加ふれば他に別種の公債を募集せんとするも國民負擔の公債全額は四億九千九百六十二萬〇百三十九圓五十錢の巨額にのぼるなり

今我邦の人口を(臺灣を除き)四千萬とし此公債總額を割當れば每一人十二圓強を得之を海外の諸國に比例するに我邦の上に出るものは佛伊白希及び北米合衆國なり英國の富強を以てして尙僅に六圓強に當れり支那の如きは債金其他の爲め外債を起せる多きが如きも尙每一人三十二

錢餘に過ぎず之に由りて之を觀れば我邦現時及び將來の公債負擔額は既に尠少と爲さず隨て年々拂ふべき利子の

も二千五六百萬圓を昇降せん
近く之を一個人に歸へんに其生計は日常の收入に依る一般の習慣なり若し人あり借債を負て生計を營み宏壯の第宅に余衣玉食するも債鬼頭背相望むらば一家長く支ふる事能はざるや明かなり邦國と雖も亦此例に洩るゝを得ず蓋し公債の募集は煩累を後世に遺すのみに止まらず往々政府の浪費を誘致し金融市場を動搖するの弊少なからず殊に外國債は經營其宜しきを失すれば爲替相場に劇變を興へて輸出入の平衡を妨害し遂に意外の損失を蒙り結局他邦の干渉となり煩累を來す事財政史上歴々存せり二三の新聞紙に今日の財政を評して借金政策と云へり借金政策是れ豈國家百年の大計ならんや古語は曾て公債を以て亡國の基と痛論せり奇激に非ざるに非ざるも亦是れ爲政治家の須臾も忘る可からざる金言なり故に國家公共の大事業を興す爲めに借債するが如きは時ありて可なりと雖も若し其用途にして軍備の濫張安張の如きものならんか遂に亡國の氣運を促すを恐る戒め慎まざる可けんや商察遠からず彼の伊國にあり
伊國は千八百六十七年倫敦會議に於て歐洲五大國の一と認識せられし以來財政一着を過ちて國力不當の軍備を張り不慮の事業に熱中してより經費頻りに増し國債安りに起り租稅彌が上に苛重し驕奢の風其聲に乗じ來りて有司

の公徳を廢敗せしめ政府の信用大に損して商工業困弊し民力衰退し怨嗟の聲は遠近に充ち餓寒街衢に横はり其極る所は遂に竹槍旗の慘劇を現出せり國を三國同盟の中樞に占め衛るに堅甲利兵大艦巨艦を以てしクリスビー在るありて以て國威の宣揚國力 充實を畫策すと雖も之を救済する事能はず近時金融市場の信用殆んど地に墜ち財政の紊亂甚しきに至れりと而して其主因を温ねて公債の妄募にあるを知れり心を公債の募集に傾くるものは須らく之を三省して可なり
故に我邦の財政を整理せんと欲せば務めて公債の募集を避け着手せしものと雖も成る可き節制は之を節省し今後募集の計畫あるものは姑く之を中廢すべし他、民力發達の度を進むるに至りて中廢の事業を其興し徐々として國威を張る誰れか之を晩しと言はん

銀行 第七

日本銀行の兌換券發行權を政府に回收し紙幣發行院を新設すべき所以は本經第一卷既に之を詳論せり此時に至りては全國の銀行は一條例の下に立ち發行院より低利の元資を借り來りて各其得意とする處の方面に向つて銳意業務に従事し資金の供給を滑かにするにより商工農は勿論運輸通信の諸業苟も國家に益あるものは悉く連綿して進達し知らず識らざるの間に國家の盛運を迎ふ可し
惑者曰はん各種の銀行を一條例の下に置き其業務を畫一

的に出さしめんとするが如きは分業法を尙ふの今日膠柱の謗りを免れざらん是れ恰も勸業銀行を創立せる政策に反し諸事業の退縮を促さんと此言や徒ら分業の名に泥んで其實を忘るゝものなり彼の勸業銀行の爲さんと欲する業務は所謂勸業銀行の成立ありて始めて行はるゝに非らず名は勸業と稱せざるも各地の銀行は其資力の及ぶ限りは該業務に従事せるは實際に通ずるものゝ悉く熟知する所なり故に分業の名を尙びて此種の特別銀行を新設するは愚人の爲のみ勸業銀行設立の要旨は特別低利永年賦の資本を供給するにありとは昨年貴族院に當局者の明せる所なりと雖も元來利子の高低は金融社會一般の事情によりて決じらるゝものにして區々たる人爲法律の能くする所にあらずるなりされば今回新設せる勸業銀行に向つて此等の希望を懐くが如きは誤謬の甚しきものと謂はざるを得ず既に然らば勸業銀行は無用のみ有害のみ寔に自然にして健全なる經濟社會の發達を期せんと欲せば此種の保護的制度は悉く全廢せざる可らず嗚呼勸業銀行農工銀行の如きは所謂苗を助長する類乎

大凡そ社會の事物は必要に迫られ已むを得ずして初めて生ずれば常に成功を期し易し頃日小銀行の合併を勸誘するものあり而して彼等は實に勸業銀行農工銀行の創設に盡力せる者共なりと彼等の昨は分業を渴仰し今は之を排斥する其舉動の輕忽なる豈驚かざるを得んや素より小銀行相互に得意を爭奪するが如き事跡ありて當業者と雖も

其弊害を知らざるに非らず知て尙且合同の運に向はざるは我邦目下の事情未だ銀行をして悉く巨大なる者のみと爲すを許さず反つて尙小銀行の必要を感ずればなり然るに今俄に其分立を防がんと欲す自家撞着の甚しきものと謂はざるべからず若し強て合同を實行せしめんか金融の疏通に障礙を生じ小商細民或は甚だ困窮すべし豈慎まざる可けんや

繁縟の更動 第八

幕府の階級政治を打破して興れる現政府は維新の初め簡易暢達を以て施政の方針 爲し百度悉く振作せり歳を閱する爰に三十年漸次法典政治に變化して無用の官衙頻りに生じ繁文縟禮是れ能事とす近來の施政は煩雜重疊して法令の多き堪ふる能はざるなり昔浦公は三章を以て天下を治む今の局に當るもの亦宜しく之に則り簡潔清明を主とし士氣を養ひ民産を殖し人心を歸一にし恰も鐵丸の如きものに鑄治する事を務めざれば國力を富實にし國威を宣揚し他日事あるに當り我に東洋の覇權を收めて歐米の諸國と等禮を舉行する事能はざらん

熟、現今の政治組織を觀るに無用と認むべき者一にして足らず殊に人の爲めに官を設くる弊の如きは勅任參事官の新設豈に適例に非ずや然りと雖も此等は枝葉のみ根底を洞察すれば官省中無用にして寧ろ有害のもの二三にし一足らざるなり試に之を列舉せんか拓殖務農商務文部の

三省是れ而已是れ宜しく全廢すべし陸軍海軍の兩廳を併置するも徒爾なり單一行政廳を置き可なり又地方の自治制漸次發達せり府縣廳の如き無用の長物亦宜しく廢絶すべし

拓殖務省は無用なり拓殖務の管理する事務は何ぞ曰く臺灣に關する政務曰く北海道に關する政務此二政務は從來内務に屬せり管理の事務只是れのみ何ぞ必しも一省を要せん何となれば臺灣に總督府あり其行政に當るものは總督なり故に之れに授くるに臺灣の統治權を以てして其責任を全ふせしめよ時創業に屬して百事敏活を要するの今日其首腦は遠く東京にあり獨り手足のみ臺灣に臨むが如き迂遠の治具に由りて新版圖の治績を擧げんと欲するは甚だ難し今臺灣は外國の貿易と軍事に關する事項多しと雖も拓殖は未だ急務ならず然るに拓殖の方針を取りて之を統治せんとするは抑、未なり又北海道は内務より裂き取りて以來拓殖務は何をか爲せし彼に在るも是に存するも同道拓殖の進歩に何の利害か有らんや拓殖務省の無用なる事斯の如し

農商務省も亦無用なり農商務設立以來の事實に徴するに無用の干渉多くしく寧ろ民業を沮喪するの痕跡あり彼の各種検査法生絲直輸出獎勵法を見ずや此種の法令に依りて何等の利益をか收め得たる商工業は由來立國の基礎たれば適宜之が獎勵の道を講ずるは固より不可ならずと雖も我邦目下の情態にありては、一官省を設置し數多の

標の弊を杜絶し軍人間の交情を佳良にし且つ其經費に大削減を加ふる事を得べし故に之を合併する事は目下の事情殊に之を切當なりとす

各地方は既に自治の制度ありて市町村制は勿論郡制も亦着々行はるゝに至りたるが故に内務の下に地方廳を置き監督せしむるの必要なし若し俄に之を全廢して人民不便を感ずるの實あるを認めば暫く畿内八道に各一官廳を假置して他日全廢の地を爲すべし音信交通の粗く發達せる今日は決して事務の澁滞なからん

今や戦後の經營は國費の己むを得ざるものを増加せり宜しく此の如き根本的革新を斷行し冗費を節省して以て國民の鬱悶を醫すべきなり

森川省 第九

拓殖務農商務文部省を全廢し又府縣廳を裁畧し陸海軍を合すの議を一見して惑者は是れ消極保守の政策なり此の如き固陋の言は開明の今日世に補益なしとせん試みに潛心して熟考せよ前、廢止を主張するものは概ね無用の長物なり苟くも國本を培養して以て我邦の富實を企圖するに必須なる者は財政急なりと雖も亦其創設を忌まざるなり故に彼の數官衙を廢台し得る所の國帑を分割して新一官省を興し森川省と呼び一定の大方針を立て、邦内の森林及び河川を根源より修理整頓せしむべし我邦の地形は狹長にして中心高山峻嶺連亘し宛然土堤を

官吏を任用し國帑を費糜するの必要なし故に其爲す所多くは徒事のみ先きに議會に絶叫して新に設置せる貿易品陳列館なるものを見よ其陳列する所は數年若くは十數年以前の流行品に係りて今や他の嗜好絶えたるもの多し恭く之を陳列して海外貿易品なりと稱するにあらざるや鑛山局ありて鑛毒事件の騷擾を未萌に防ぐ能はず商工局ありて彼我商工業の大勢を普知せしむる能はず世間農商務を怪物屋敷と評するに觀るも之を廢するは民意なり

文部省亦無用なり惑者曰ふ文部大臣其人を得ざるが爲め教育に大方針なしと是れ文部を推究せざるの過ちなり其官制第一條に曰はずや文部大臣は教育學問に關する俗務を管理すと單に教育學問に關する俗務を處理する官衙に過ぎざれば他省中一局を設けて文部の事務を移せば足らん但し大學の如きは各自獨立せしめ中學は大學に標準して其教育方法を定めしむ可し小學に至りては地方の適宜に一任し就學の一事を除くの外之に關涉せず自然に發達せしむべし各地方亦其人なきにあらざるとへ中央の干渉なきも我郷里の子弟をして無學の徒たらしむる事なからん

陸海軍に關する行政廳は之を合一して兵部省を置き二局を設けて之を分掌せしむべし然る時は軍政一途に出で、平素兩軍の感情を圓滑にし其戰陣に臨むや互に弓手となり馬手となり敏活の舉措を實行するに便利多く奇功を收むるに容易なり況んや從來陸海軍の間に行はるゝ競争軋

築けるが如く其兩邊は共に海に向ひて甚しく傾斜せり故に無數の水源は其流派を集めて大河を形するに遑あらず從て湧出すれば從て流下し河線數多相接す甚しきは三四の河線一港に注出するものあるに至る地形此の如し故に方里二萬五千(臺灣を除く)の國土にして五里以長の河川三百十有七線あり然らば則ち我邦は山嶺(即ち森林)と河川を以て領地となすものなり森川省の創設豈已むを得んや

又我邦の地位は温帶圈内にあり四面環海なるを以て海面含温の空氣は咄嗟にして中心の山嶺に達し其冷氣に逢着して無比多量の降雨を生ず此雨脚は濫伐の爲めに枯禿せる諸山を一過し修理未だ成らざる河川に沿ひ縱横奔騰して海口に出す故に累年の水害巨萬の損耗を生民に蒙らしむ然るに山林局土木局の如き局衙に其事を分掌せしむ其功の擧らざる素より宜なり

幕府政柄を執る三百年全國は諸侯の封土に分割せられ森林の保護河川の修理一定の策を定めて實行する事能はず然るに尙今日の如き水災の頻繁ならざるものは各土の執政其責に任じて盡す所ありしに歸せずんばならず今は普天の下悉く一政府の統治する所となり全國普及の治道を布くに些の支障ある事なし然るに維新以來三十年森林の保護其緒に就かず河川の修築其効を果さず反つて水災の凶報に驚くものは何ぞや其本を忘れて其末に走り浮華を以てとして實務を蔑にせしに坐するのみ今に於て猛然反省

して海國の大本たる森林より始め次で河川を修理して國
資の根柢を培ふすべし河川に修り森林を生長として繁茂
せば水災閉息し田野荒廢を免れ空國運傳の要具の如きも
破壞の患難に至らん蓋し森林を重じて以て天下を治む
るの要道と爲すものは彼れ獨逸の帝國あり我邦の如きも
之に則り尚河川を合せて之を整理し以て萬年の大計を確
定すべし尚姑息偷安を事として荏苒年所を経過せんか邦
内の沃野憔悴たる荒蕪に變化せん事蓋し百年を待たざら
ん

虚飾 第十

上段述べたる所の如く軍備を充實し財政を整理し政務を簡
明にし民衆の元氣を振作して以て國家の基本を鞏固にし
我邦を泰山の易きに置かんや欲せば政府先づ斷乎として
虚飾是れ尙むの弊風を一洗せざる可らず蓋し繁縟滑澤な
る法典政治の行はるゝは職として常路者が虚飾を尙び浮
華を競ふの痴情に由らずんばあらざる顧みるに維新の一舉
は幕府累世の積弊を破壊し階級の制度を全廢して天地爲
めに清淨たり成功の偉大なる宇内の耳目を驚かせり何ぞ
圖らん相次ぎて局に當る者は先輩の精勵刻苦之を致せし
を追思せず目前の治安に馴れて裝飾粉靚陋政を覆掩し偷
安姑息是れ事とす故に維新の精神に反せる門閥政治を馴
致して復た階級制度を再興し貴族五等の爵を設け加ふる
に勳功の表彰を以てす彼の胸間に金光燦爛たるものを連

ものあり爵位族籍何の用をか爲さん徒に奢侈の弊風を誘
導するに止まるのみ宜しく之を廢絶すべし

奢侈 第十一

遼東の還附以來臥薪嘗膽の聲全國に反響し勤儉是れ務め
んとするの趨勢ありき然るに上の好む所下之より甚しく
爾來僅に一兩年奢侈の物品盛んに輸入せられ反つて工業
の原料品は退歩の傾あり以て生産力は戦前に加らずして
消費力は戦後に増加せるを知るに足らん語に曰く奢侈は
收支相應せざる濫費なりと知らず此濫費を節制して奢侈
の弊風に抗するの力あるもの都鄙果して幾許がある
徳の流行は置郵命を傳ふるよりも速かなりと徳既に然り
況んや奢侈をや其弊の流行する豈當に置郵のみならんや
是れ古今東西に通じて奢侈の爲に其國を亡せる者多き所
以なり古の羅馬帝國は亞細亞亞非利加を捲席し歐洲の諸
邦を併呑し國富み兵強く獨り天下に横行せしが一朝奢侈
の弊風に感染するや盛宴に爛醉し蒸湯に昏睡するの間綱
紀弛廢し財政紊れて威烈宇内を壓せし大邦も族蠻の襲撃
に忽焉として瓦解せり印度西班牙の如きは共に其覆轍を
踏襲して或は亡び或は衰へたるものにあらずや
今や我邦瞻仰の地位にあるもの概ね宏壯なる邸宅を構へ
美食盛裝相競ひ得々として之を文運興隆の致す所と稱し
簡易質朴なる日本固有の尙俗を棄却せんとす滔々として
浮華の弊習天下を風靡せんとするは固より宜なり嗚呼臥

懸し輕車駟馬に鞭ちて揚々たるものは以て婦女を喜ばし
め以て愚人を欺くべしと雖も國家の治安に何かあらんや
我邦上古の制を見よ上に 帝王ありて下は悉く齊民のみ
皇民の間所謂門閥者流の保障あるを見ず今の貴族を特寵
して之を君民の間に介立せしめ以て上下を隔離するが如
きは決して維新當初の精神に非ざるなり
豈獨り五等の爵勳位の表のみならんや位階族籍も亦虚飾
のみ是等の制度あるが爲めに貴族高位の輩は實業勤の
模範となる事能はずして却て驕奢浮華の弊風を是れ誘致
す民衆發達し民權貴族を壓倒する歐米の邦國の如きは貴
族の行爲習俗を左右するに足らずと雖も我邦にては且舉
動は直に俗を變じ風を移すの力あり故に爵位勳等族籍は
悉く之れを廢絶せざれば日を追て流行を逞ふする處の淫
靡怠傲の弊風を一洗し維新の當初に復歸する事能はざら
ん惑者曰はん貴族は 皇室の藩屏一朝にして之を廢せば
皇家孤立となり國體或は危からんや何ぞ知らん今や
皇澤天下に洽ねく億兆均しく 皇室を奉戴し 皇家の爲
には身命を愛惜せず心私に藩屏たるを期せり清征の役卒
伍にありし者の行爲を見よ思ひ半に過ぐるものあらん
殊に怪む爵位族籍の世襲となりて人に存せず家に存し毫
末の勳功なきもの亦能く高爵に居り貴族に列し私家の財
産をも世襲する事なり是れ門閥制度を扶掖するものに非
ずや宜なる哉貴族高爵の輩往々驕奢淫逸に流れ甚しきは
其財産を蕩盡して廉恥の何たるを辨へず終に罪囚に陥る

新嘗膽の反響は今や何所にか之を聞かん既往は咎めず來
者は追ふ可し當局者先づ奮發興起して海内の惰眠を覺醒
せよ

勤儉 第十二

明治十二年太政官の達に係る 詔勅に曰く
各地御巡幸親シク民事ヲ被察内政深ク御軫念被遊今般
左ノ條々被仰出候
一、凡百般ノ政務勤儉ヲ本トシ冗費ヲ省キ務メテ簡
實ニ就キ專ラ民生ノ事業ヲ勸ムヘキ事
一、官省ノ建築其他 切ノ土木既ニ着手シタル分ヲ
除ク外可成省略可致事
一、各地方官ニ於テモ厚ク旨意ヲ奉體シ費用ヲ節略
シ民力ヲ愛養ス可キ事
人勤儉なれば其身榮ゆ家勤儉なれば其家榮え國勤儉なれ
ば其國榮ゆ勤儉なる哉勤儉なる哉各人本業に精勵し驕奢
遊佚の惡風を排し以て自衛獨立の美習を養へ
抑勤儉の効果は如何セザンの役佛人は城下の盟を爲して
五十億の債金を獨國に獻せしや佛國の困弊は急に回復せ
ざる可しと何ぞ圖らん獨人戦勝に酔ふて往昔の勤儉を忘
れ巴里の華冠里昂の美服相競ふて之を購求し五十億の巨
資は數年にして曩日の戦敗者に還歸せり佛國の創痍を回
復するの速かなりしものは國民擧げて勤儉を旨とし獨國
の行爲に反せしに在るのみ我邦は今や戦勝の獨國か戦敗

の佛國が敢て之れを言はず然れども前掲の 詔勅に鑑みて勤儉を以て爲政の本とし須く本經の論述する處を施行して以て帝國の富實と光榮とを遠圖せよ

護國經現世篇卷之二終

護國經現世篇卷之二題詩

丁酉新年試筆

紅梅紫藤開後先宜月宜雪
四時妍南池游魚躍初日東
林飛禽謳新年節凌陶李尙
護國才駕賈晁且補天自笑
以拔山翻海手閑撫焦尾十
三弦

護國經現世篇卷之一

明治廿八年八月印刷頒布

護國經現世篇 卷之一

護國經現世篇卷之一

目次

強國名實 第一……………一頁

二財團二財源 第二……………二頁

四惑 第三……………三頁

生靈利益 第四……………三頁

中央銀行寂滅 第五……………三頁

義務眞象 第六……………四頁

輪廻妙用 第七……………五頁

發行院 第八……………六頁

銀行條例 第九……………七頁

償金 第十……………八頁

租稅 第十一……………八頁

善惡 第十二……………九頁

卷之一小引

目次終

護國經

現世篇卷之一 三輪信次郎著

強國の名實 第一

日清和成りて東洋の形勢轉變し倭馬として強國の名は我邦の上に加れり歐米の各國は漸く娼疾の念を起して我邦を覬覦し以て寸隙に乗せんとす熟ら惟ふに今回の全捷は

聖皇の威徳將卒の忠勇國民の熱心三者相合するの致す所なりと雖も抑亦多きを天佑に歸せざるを得ず何を以て之を謂ふや平壤黃海其他の勝戦の顛末耳目に觸る所の者之を證し得て餘りあり天佑は豈に常頼すべき者ならんや一旦緩急あるに際し強國の名ありて強國の實無き者は甚だ危し我邦固より強國の實無きに非るも其強は未だ全しと謂ふを得ざるなり何を以て之を謂ふや抑建國以來の大捷を得たる國民が慶祝の盛典を舉行することを憚るの觀あるのみならず鬱々として憂色あるが如きは蓋し大捷の結果美を盡すと雖も未だ善を盡さざるに因由する者にして是の如き結果を得たるは新に強國の名を得たるに拘らず其實に缺くる所あるに歸せざるを得ず請ふ歐米の強國を看よ既に名實を併有し而も且防備に汲々として尙及ばざるが如き所以は方今の形勢已むを得ざる者有ればな

り況んや新に強國の名を得て強國の實未だ全からざる我邦に於てをや宜なり臥薪嘗膽の聲國中に浴ぬく相唱和すること是即ち國民皆憂ふる所あるが故に非ずや

二財團二財源

是時に當りて國家富強の名實を併有するの大策を案出し據りて以て萬世不渝の方針を確定し上下心を一にして之を存立扶持するの企圖無かる可からず萬世不渝の方針とは何ぞや名實を併有するの大策とは何ぞや其要三有り一に曰く「防備」領土の中樞四圍の要害に軍港城砦を築き諸種の砲銃艦艇を増加し附屬の工場等を設爲するなり二に曰く「防備の維持」軍港城砦に軍人軍屬を充て機器彈糧を實するなり三に曰く「戦費の蓄積」既に防備あり又能く之を維持するに足るも軍人軍屬をして敏捷活潑の運動を爲し敵先を制せしめんには平素巨萬億の戦費を蓄積し戦時に在りては大本營の隨意に之を支出するの途を開通するなり此三要全く備り始めて眞強を稱するに足らん而して此三要を備へんが爲め二個の財團二途の財源を創置せざる可からず試みに之を創置せんとするか今時を以て最好とす請ふ其綱概を辨せん爾後七個年間に漸次收入する所の償金參億圓在る有り此金額は偏に戦勝に依りて得たる者にして豫期せざりしものなるが故に之を以て經常の國帑と爲さず此内貳億圓を以て一個の財團を作り此財團内より今回の戦争に關する軍人軍屬等の賞賜恩給等を扣除

し、殘餘を盡して第一要の防備に當て地租酒税を大に増加して一途の財源を發し此増加額即ち新財源を擧て第二要防備の維持に當つ可し惑者言はん大に地租酒税を増加するは目下民力の堪ゆる所にあらずと惑者は國中に沿ねき臥薪嘗膽の大膽を開かずや是れ豈に空言虚響ならんや偏に忠君愛國の民人が増租加税を歓迎する兆祥と見る可きなり

第一要第二要は既に論定せり獨り第三要「戰費の蓄積」に至りては巨萬億圓の蓄積成れりとするも尙餘り有るを感せず其目的甚大無量なるを以て一財團一財源を併せ作り始めて新に先づ貳億圓の兌換券を發行して我領土中の通貨と定め確實の抵當を領收して各銀行に貸附すれば其利潤は毎年大凡五百萬圓を得べし此五百萬圓は多からざるが如しと雖も外國公債等に換へ年々之を蓄積すれば平均貳歩の利殖を爲すも十箇年を経て元利五千五百萬圓に積る之を一財源となし之に一財團たる準備原資金を合すれば實に壹億五千五百萬圓と成る是れ則ち此三要「戰費の蓄積」にして年を重ねること愈多れば積むこと愈厚く終には幾億幾千萬圓の巨額に昇らん此巨額は即ち大本營が戰時隨意に支出するを得て平素充實せる我邦の陸海軍に敏活の運動を興ふべし此の如くにして國家富強の大策立ち萬

世不渝の方針成る而して後強國の名實兩ながら全きを得國民始めて安堵すべし

四惑 第三

惑者言はん目下我邦は中央銀行なる者あり確實の準備を置き壹億餘萬圓の兌換券を流通し兼て邦家の財政を經緯するを以て商工業目を追ふて進歩し駸々乎として歐米の強國に凌駕せんとす政府は先に歐米の偉績に則り自ら紙幣の發行權を拋棄して此中央機關の良制を建設し財政漸く緒に就く今之れに數年を假せば其美果を得る火を視るよりも明なり然るに別に兌換券を發行せんとす其意果して中央銀行を何の地に置かんと欲するか

又言はん目下の通貨流通高は壹億六千餘萬圓なり然るに二億圓の兌換券を發行し年々五百萬圓の利を得んと是れ何等の據基あるか

又言はん維新前は姑く舍くも明治政府中興以來貸付を自營して損失常に多かりしは天下の普知するところなり是故に歐米の諸邦文明を以て自ら居る者は一も政府より紙幣を發行するを視ず

又言はん假りに論者の言を許して政府自ら紙幣を發行せんか之を貸付するに當り利子の高下抵當の鑒別の如き本來無營利的の政府何を以てか之れを能くせん現今の中央銀行は私立營利的なりと雖も尙時々小損を免れずと以上の四惑は別に詳説す可しと雖も先づ大概を爰に略解

せん

第一惑 中央銀行は五箇年の期間中漸次本業を減縮して終に寂滅に歸せしむ可し國庫金の取扱等は今日の如く處辨せらるゝ方法別に在りて存せり

第二惑 發行高を二億圓と打算したるは目下の流通高既に壹億六千萬圓を超えて更に盈溢を感せず且近年の形勢より推し殊に戰勝之餘威は爾後商業を振作する必ず可きを以て貳億圓の通貨を要するは蓋し兩三年を出でざらん又利潤を五百萬圓と打算したるは貳億圓を三步利付にて貸付け其五厘即ち百萬圓を以て發行院の經費兌換券の製造費等を辨じ残り二歩五厘即ち五百萬圓となるが故なり

第三惑 從來政府の貸金に損失多きは其處置に適當なる法則の無きに坐するなり今や既定の資本を募りて營業する銀行に限り一定の抵當を取りて貸付し利子舉らず元金滞らば乃ち抵當を賣却して元利を償收せば可なり文明の邦國に類例無きも何の妨かあらんや

第四惑 發行院に高等官國會議員全國大銀行者より成立せる數十名の評議員を置き毎年一回利率及び抵當證券の類例并價格を論定せしめて可なり其抵當の鑒別は兌換券の出納と共に適宜の院屬を置き擔任せしむれば足らん

生靈の利益 第四

世益開けて硬貨通用の不便を感するや紙幣發行の事起る紙幣の發行より生ずる利益は巨多にして無準備無兌換の

時代は勿論此時代を經過して硬貨兌換の制を布くに至りても尙邦土の隆盛に伴隨して其の利益倍多きを加ふる者なり此の倍加無量の利益は本來何人の手に歸すべきものか國家の主治者之を所有するの權あるか否、被治者之を所有するの權あるか否、此の利益は國家の公權より生ずる者にして全國生靈共有の利益なり目下此利益は何人の手に存するや試に我邦維新後に於ける其所在を追隨せん

維新の初め政府は自ら此利益を握りて十三年限りの紙幣を發行し以て中興の須要に應じたり尋で無年限のものを發行し前者を消還し了り連綿流通して今に到る是より先き明治五六年の頃亞米利加合衆國の法例に據り國立銀行なるものを創立し銀行紙幣を發行せしめ此利益の一部を割きて之に附與し猶十年を経て大英王國の制度に鑑み日本銀行を創立し兌換銀券の發行を公許し此利益を擧げて之に附與するの方針を定む今や將に數年ならずして此利益は全く日本銀行の専有に歸せんとす嗚呼此利益は國立銀行之を私有するの權あるか否、日本銀行之を専有するの權あるか否、國家の公權より生ずる利益なれば政府は維新の初に溯りて寧ろ自ら之を取るべし

中央銀行の寂滅 第五

今や我國をして富強の名實を併有せしめんが爲め二財團二財源を創置せざる可からず即ち二財團は償金を分ちて

之を作り一財源は既に租税の増加に依りて之を發するの道と論じたれば猶疑る所の一財源は租税以外に求めざるを得ず然らば則ち之を奈何せん幸に國家の公債より生ずるところの全國生靈共有の利益にして今や將に一私立會社たる日本銀行の手に委せられんとする者あり其量洪大無邊にして此財源に充つるに餘あり政府之を自用せば更に國民の負擔を増すこと無く忽にして二財團二財源全く備はり富強の名實を併有するの基礎は立どころに成らん惑者言はん目下日本銀行の株券は百圓の拂込にして其價格四百圓に垂んとす此の如き有利の成業を擅に奪却し去らんとす豈に苛酷無法の至りならずやと是れ思はざるの甚しきものなり何となれば此の如き法外なる有利事業は本來國家の公債より生ずる利益を壟斷するより出來せしものにて一私立會社の擅にすべきものに非ざるなり故に取て以て國家の強實を完成せんとす理の當に然る可きところなり況や假すに五箇年を以てし應分の益を株主に遺さんとす而して其株主も亦我が忠君愛國の人民なり必ず欣然として此舉を贊助せん

五箇年の末に於て日本銀行は既に寂滅に歸せんも其時期中經濟社會の進歩に催促せられて一千萬圓以上の巨資を擁する數個の銀行は世に出づるならん(聞く所に依れば某國立銀行頃日の總資産實價格九千萬圓を超ゆと謂へり其數百の株主が黨與門族を樹て黑白異同を唱へ四分五裂すると假定するも尙此一銀行は五箇の大銀行に分立する

を得ん況や時局に明達なる士人は濟々として國立私立の銀行中に現在せり此多士も亦豈に拱手して已むものならんや必ず陸續として大銀行の勃興するを見るべし)故に日本銀行寂滅し之を繼承する銀行にして若し國庫金の取扱を辭退せんか數十萬圓の手續料を掲げて此取扱を依頼せんとせば新創の大銀行等は相争ふて之に應じ決して不便を感ぜざらん抑通貨の妙用より生ずる利益は一種の特異ありて口に言ふ能はず書に筆する能はざる所に存し當事者獨り之を曉知するを以て競争の餘勢或は手續料を辭するに至るも未だ知るべからず日本銀行の寂滅は國庫金の處辨には煩累を及ぼすの患無し

義務の眞象 第六

惑者言はん紙幣發行の權と之に伴ふ利益は全國生靈の共有すべき者なれば一私立會社之を專有するは非理なりとの説是れ或は然らん又國庫金の取扱は他の新立大銀行競ふて之に當らんと是亦或は然らん然れども一朝にして中央銀行寂滅せんか金融社會は忽焉暗黒とならん何となれば目下日本銀行が紙幣發行の特權利益を享くるが爲めに擔任する義務の多大なるは言語に絶すと謂ふ可し抑政府の紙幣消却の爲めに巨額の金員を無利息にて貸付せし如き外國貿易獎勵に資せんが爲めに非常の抵利を以て正金銀行に貸付せし如きは勿論大阪馬關札幌の支店設立の如きは自己の損害を顧みず偏に國家の金融を疏通せんが爲

めにして此經營の如き容易の業にわらず又諸銀行の要請に依り擔保品收受の途を開き大に金融に便するが如き市場金融の緩急穩否を察し利息の割合を上下し貸出金を許否するが如き時に五分税付の兌換券を發行して各銀行の急須を救ふが如き時に今回の戦費支出に關しては獨り率先して軍事公債の募集に多額の申込を爲したるに止まらず經營百端殆んど一周年の間金融上些の支障無からしめたるが如き實に其義務として擔任する所の多き言語に絶すと謂ふべし而して効績の顯著なること創立以來年所を経ること多からずして尙既に斯の如し今之に數年を假せば我邦金融社會の面目を一洗し完全の美域に進達せんとは是時に當りて日本銀行寂滅せんか忽ちにして金融社會は暗黒と爲り恰も運輸通信上より蒸氣電氣を全没せるの觀を呈せん豈に寒心せざる可けんやと

嗚呼噫惑者の言や陋なり拙なり惑者は唯假山の織工を感じて富嶽の高大を觀ず盆池の奇巧を覺りて海洋の廣遠を察せざる者而已假山盆池固より無きに勝ると雖も富嶽海洋の効用無量なるに比す可からず請ふ詳らかに惑者の所謂日本銀行の義務なる者を説破せん彼の政府に無利息の貸付を爲すは恰も老婆の他より贈與せられたる重箱中の數十箇の饅頭中壹貳を取りて初穂と稱し神佛に備ふるの故智を襲ふ者なり是果して義務と謂ふ可きか正金銀行に貸付するは低と雖も尙利を取る之を兌換券の製造費に比較し來れ差益の多きこと掩ふ能はざらん是れ將た義務か

支店設置の如き假令今日に利益を生せざるも數年の内其營業上より得る所は必らず失ふ所を償ふて餘あらん一般の營利事業は概ね當初收益無きも他日を期して起業するを通例なりとす支店設置のことも亦何ぞ之れに異ならん此の中何の義務か存せん擔保品の收受の如きは曾て要求銀行の狼狽に乗じて偏に自己の慾望を遂たる者のみ條例十二條の精神に背き他銀行と錙銖の利を争ふ者のみ彼の金融の緩急を察し貸金を許否し利子を上下するが如きに至りては之を行ふ者の心は或は金融の調和に在り惑者愚者は之を視て以て義務とせんも偶々以て自然の流通を阻碍し害ありて益無き者なり是れ決して義務と謂ふ可からず五分税付兌換券の發行は常に七歩八歩の貸付と成れり即ち二歩三步の利益を取得する者は豈に義務に屬せんや軍事公債の應募云々は國家財政の樞機に立ち巨大の資産を擁しながら逡巡踞阻僅かに他の一大銀行と同額の申込を爲して其責を塞きたるが如き當時具服者の笑柄となり今日に於ても其痕跡歴々たり況んや一週年の戦費に支障なかりしは國民一般の忠愛心之を辨濟したるを悟らす其處理の宜に出たりと誇言するに至りては只抱腹絶倒するの外無し青年の論客黃口書生尙且之を肯せざらん今や項を改めて日本銀行の寂滅と共に發行院の組織成る時は果して金融社會は暗黒となるや否やを觀ん

輪廻の妙用 第七

發行院を新設し壹億圓の準備を置き貳億圓の兌換券を發行し全國に基布せる數百個の銀行に對し三步（或は四歩五歩とすることあらん）の利息を取り一定の抵當を收めて其要求に従ひ依估最負の沙汰無く輒く之に貸付すること、爲せば金融社會は平等の利益に浴すべし固より土地の遠近都市の繁閑貨物の多寡等有るが爲めに甲地乙地均一の金利は神速に望む可からずと雖も優勝劣敗自由競争の効果に由り自然の流通阻碍せらるゝ所なく目下の如き利息の大差を匡濟する而已ならず圓轉滑脱甲地の餘裕は朝に發行院に歸來して夕に乙地の缺乏を補ひ水の低に就くが如く涸れず溢れず輪廻の妙用を企ふ可し恰も富嶽海洋の無爲なるが如くにして自然の法則に由り四時の氣候を調利するが如く發行院の効用は靜謐平穩の間に著はれん何ぞ區々の拙策陋計を施すを須ぬんや彼の金融の緩急を擅悔せんが爲めに貸付を許し利子を上下するが如きは凡俗の身を以て人間の智能以外鬼神の事を行はんと欲する者にして偶々以て天然の流通を妨げ金融社會を過らんとす是れ誠に世に益無くして事に害あり此類の事は務めて之を避くるを以て經濟の眞理に適ふものと爲す

頃日坊間興業銀行農業銀行の設立を説く者あり是亦特權を得て一種の紙幣を發行せんと爲す私立營利的會社なり今や特權ある一日本銀行有りて而して金融社會に生息する者既に之れが鼻息を窺ひ喘々焉として其怒に觸れざらん

紙幣の發行院は

天皇に直隸し院長を勅任として院務を總理せしめ數名の書記官を置きて金庫貸付抵當出納庶務等の分課に長たりしめ雇員各若干員を置き紙幣並抵當證券の監査枚數記帳等の事務に従はしむ而して評議員は十省の次官貴衆兩院議員各拾名（毎年議會召集の初兩院各投票を以て選任す）大銀行者十五名（東京五名大阪備前各二名其他の要地六箇所を撰定して之より各壹名を選任す）（總員四拾五名とし特に總理大臣大藏大臣は自から必要を感ずる時は入りて評議員の數に加はるを得るとし院長を以て議長に充て毎年三四月の交會議を開き前數年の實況を標準とし現時の情勢を斟酌して抵當證券の類例並に價格を評定せしめ貸付の利率を高低し期限を長短せしむ可し尤も事變あるに際らば臨時に之を招集するを妨げず其抵當の價格は凡そ數箇年の平均を取りて數割を削り尙現時の價格を之れに參算せば穩當の程度を得ると難からざらん又利率は所謂「戰費の蓄積」に充つるが爲めに固より其高きを望まざるに非ずと雖も之を負ふ者は即ち國家生業の血脉たる通貨なるを以て重課は農工商を疲弊し國力を減耗すべし故に既往の成敗に鑒み現在の情勢に察して年三步を以て數年の間試行せんか又或は紙幣の流通高壹億五千萬圓に至るまでは利息を三步とし以上三千萬圓に四歩を取り此高を越ゆる時は昇して五歩と爲すも可ならん以上は發行院評議員が評議の大略を憶測せるなり當局者は審議を

んことを務む其醜狀誠に正視するに忍びざる者あり更に之に興業銀行を加へんか金融社會は終に獨立の氣象を根絶して永劫振作の期到ると無からん立憲政體の國民にして斯の不倫の財政に默從す可けんや宜しく起つて此弊を排除すべし惑者言はん立憲政體の諸強國は中央銀行興業銀行を置き金融社會圓滿なり之れに倣ふ何の不可か之れ有らんと此論亦淺識に屬すと謂はざるを得ず貧富の程度大に相懸隔するは社會の進歩に巨害あり先進の諸國は既に其弊に苦めり我邦の如きも之を豫防せざれば噬臍の悔あらん今日に當りて大會社を創立し之に特權を附與するは人爲を以て貧富の大懸隔を促す者にして恰も痴人の自縊に均し豈に省察せざる可けんや此理を推して正金銀行も亦五箇年を期し漸次低利の貸付を回收し純然獨立せしめて自由の競争場裏に入らしむ可し邦内一般も特權ある銀行無く平等齊一の基礎に立ち發行院に隸屬し各其氣力を振つて自家の利益を經營す而して後始めて眞の金融疏通し圓轉滑脱輪廻の妙用實行せられん是時に到らば諸外強國は獨り我邦の武勇絶倫を稱する而已ならず亦無二の理財法を感歎するに至る可し斯の如くならざれば以て萬世一系の帝統を奉戴する我國民の忠勇智能を宇内に發揮するに足らざらん

發行院 第八

盡して之を取捨潤澤せば蓋し大過無からんか今此紙幣發行院を東京に置きて全國の銀行より一定の抵當證券を添へ借用證書を出して借用を申込む時は請求の順序を追ひて其金額を貸付し慾望に飽かしむ可し唯我邦領土の長き汽車汽船を藉るも中國以西は時日と運輸の不便を感せん故に發行分院を岡山或は廣島に置かば此累を避けて全國の流通上に大なる故障を生ずること無からん分院の組織の如きは姑く省きて説かざるなり

銀行條例 第九

發行院成立して全國の銀行に對し平等均一の貸付を實行するに至らば宜しく現今の如き各種銀行の雜立するを矯めて唯一條例の下に居らしむ可しと雖も金融社會は急劇の變動を患むを以て假令眞正の改良を施行するにも尙年所を假借せざる可からず故に現在の銀行には彼此を選ばす姑く一様に貸付を許容し今の銀行條例中第十一條を削除して別に數箇條の追加を爲し以て東京は百萬圓大阪横濱は各五十萬圓其他の都市區は拾萬圓以上の資本を募りて設立する銀行は發行院に對して其定むる所の抵當證券を納るゝときは拂込資本金の壹倍に迄るの金額は一定の利息を以て隨時に定期貸付の請求を爲し得ることを許し又發行院評議員の選舉權あることを規定し尙此條例施行の後五箇年以内此條例を遵奉せざる者は發行院より直接の貸付を受くる能はず其評議員の選舉に與るを得ざるこ

を指定す可し然る時は自今五六年にして全國の銀行は、
 整然として一條例の下に居り同一の基礎に立ち同一の業
 務を營み不羈自由の競争場裏に在りて各其得意の方向を
 指し實業家の便益を謀る可し果して然らば商業繁昌す可
 く工業發達す可く農業隆興す可し通信運輸の事も従つて
 盛大を致さん何ぞ區々たる興業銀行農業銀行の如き弊害
 極り無き特許私立會社の新創を要せんや
 國立銀行も亦一種の特許私立會社なり是亦五箇年を期し
 て其紙幣發行權を回收し他の諸銀行に同じからしむ可し
 頃日の繼續論の如きは夜陰に乗じて狐狸の驚馬を跨りて
 行くに均し天日一たび光輝を放たば忽ちにして其所在を
 失はん而已齒牙に掛るに足らざるなり

償金 第十

償金三億圓の内二億圓を一財團と爲し軍人軍屬等の賞賜
 恩給等を扣除し殘餘を盡して「防備」に當つ可しと言明せ
 るは唯割當の凡概を指示するに過ぎず何となれば「防備」
 の扶植は「防備の維持」の確立如何に在りて恰も車の兩輪
 の如く防備と其維持と兩々相待ちて實用を全うする者な
 れば獨り「防備」の原費額のみ單一に算定すること能はざ
 るなり試に一時賞金並に年金の基本金等は三四千萬にし
 て足る者とせば殘金壹億六七千萬圓を分ちて方今必要急
 須なる海陸の防備に當つ可し若し尙足らざれば他の一財
 團(紙幣發行原資準備金)壹億圓の内尙二四千萬圓を割き

て之を補ふも可ならんか準備原資金は多々益、多きを望
 むと雖も刻下貳億圓の紙幣を發行せんと欲せば實際六七
 千萬圓を積みて不足の憾無ければなり然りと雖も新設の
 「防備」を維持するに連年必須なる費額無かる可からず今
 此費額を精算して幾千萬圓と爲し之を支辨す可き一財源
 たる地租酒税の増收豫算額と對比して同額を得れば最も
 佳なり若し増收の豫算額維持費の精算額に超過するも尙
 佳なり唯増收の割合を減削するに止るのみ之に反して豫
 算額足らざる時は此額初より民力の耐ゆる所を程度とせ
 る者たるは論を待たざれば更に之を加倍する能はざるを
 以て勢己むことを得ず其本に反りて「防備」の計畫を適宜
 省略し従つて之れが維持費を減削して租税の豫算額に同
 一ならしめざるべからざるなり獨り此地租酒税増收額防
 備維持費額防備原費額軍人軍屬賞給額を確定するは先づ
 節目より精査を遂げ之を累積する結果に外ならざれば是
 れ固とに各當局者の擔任する所に屬す

租税 第十一

國家を治むるや租税の徴收を骨髓とす國家租税無し政府
 一日も成立すること能はず而して租税の徴收は大手腕を
 要す區々たる細刀の微蟲を彫刻するが如きに做ふ可から
 ざるなり租税徴收の道は公平を貴び簡易を貴ぶ公平なら
 ざれば以て文明の國民を服するに足らず簡易ならざれば
 費用夥多にして實收尠少ならん既に「戰費の蓄積」に要す

一財源は紙幣發行の利益を以て之れに充つることを主張
 して數段の論説を累ねたりと雖も「防備の維持」に要する
 一財源は地租酒税を増加す可しと論下せる而已何等の理
 由に基きて地租酒税を選擇せるを明示せざりしを以て爰
 に其要概を解かんとす抑土地は生靈の齊しく居る所なる
 を以て之に課するは公平中の公平なり況んや現今二歩五
 厘を課するの更に更に一步を増課するとせよ立どころに
 壹千五百餘萬圓を得て別に徴收費用を増さざる可し又酒
 税は目下我邦第二位の巨額を收得する源泉にして是亦徴
 收の方法租備はる且や國民貴賤上下の別無く酒を用ふる
 廣ふして大なるを以て土地に於て公平なる而已ならず増
 税亦多費を要せず是れ即ち一新財源を地租酒税に限りた
 る所以なり

然りと雖も酒を視て贅澤品のひと爲し之に禁止税を加へ
 んと欲する俗論の如きは文明の進歩に鉅害を及すに由り
 儼に之を打撃せざる可からず何となれば絹絲の衣服金玉
 の裝飾は下等人民の贅澤物視するところなりと雖も之を
 纏着する人に在りては決して贅物に非らず纏着せざれば
 其社會に交る能はず寧ろ一種の必需品に屬せり肥肉膏粱
 も亦同じ特に酒は王侯貴人より以て奴僕の業を執る者に
 至るまで之を愛視する實に夥多なり或は冠婚葬祭の儀式
 に或は親戚朋友の會宴に或は胸膈鬱結の開掃に或は筋骨
 疲勞の慰療に皆酒に非れば能く其思望を甘濟する能はざ
 るなり如何ぞ酒を以て贅澤物と爲すべけんや畢竟贅澤な

る文字は會て自家の狂愚時務に通ずる能はざるに由りて
 當世に冷遇せられて貧困の生活を忍べる偏僻の腐儒が他
 の榮達を羨み此二字を藉りて胸中不平の熱塊を暴露せし
 者にして同臭味の輩之れに雷同し弊習今日に至りたるな
 り本來現世に一種の疾病たる疣贅の外所謂贅澤物なるも
 の須臾も生存するの理有らんや今若し酒は贅澤物なり濁
 すれば水を呑む可し綿衣は贅澤物なり寒ければ氈を纏ふ
 可しと言はば禮節も行ふ能はず音樂も奏する能はず尊卑
 長幼貴賤上下一切無差別と成りて世は再び野蠻蒙昧に陥
 没す可ければなり

善惡 第十二

痴童學人沖融亭の樓上に在り護國經の現世篇租税第十一
 の草を終へて駿臺南崖の森林を望み憮然たること稍久し
 遂に雲霧の琴前に端坐して小督の曲を彈せんとす會々客
 あり來りて坐に着く學人省せず以て我意の適く所に從へ
 り客は机上の草稿を手にし讀過一番思ふところ有るが如
 し曲闕るを待つて學人に謂つて曰く善哉此論唯實行する
 能はざるを憾むのみ抑四千萬の同胞は意思固より歸一な
 る能はず之を賛するあり之を否するあり甲論乙駁し喧
 囂紛擾の中必ずや數年を経過せん幸にして贊者終に勝を
 制、之を實施せんとする機運早晚到ること有りとするも
 三億の償金は既に盡きて所謂二財團を創置するの根基を
 失ひ従つて實行を觀る能はざらん學人の論善しと雖も終

に空論に歸せん空論は徒に世の紛擾を招くに止るのみ學人籍を實業に置き空論を恣にする可ならんや國富強の名有りて實無きは危しとは既に命を懸けり人實業家の名ありて空論せば如何と

學人曰く方今の時勢は決して償金の浪費を許さず數年の後に至りて其支出せられたる道途を追へ其費目は必ず差別あらん而も實際は尙學人が三要以外に馳するも多からざらん故に此論の實行一日後れば國家一日の損にして三年後れば三年の損有りとも雖も五年十年百年千年を経過せる後に到りても決して實行力を失ふの患有る無し若し三億圓悉く他の武備彈藥等に變形し金銀貨幣として残在する者毫も之あらざるべきは地租酒稅若くは他の租稅を徵し中央銀行に至りて一時に之を硬貨に引換ゆれば準備原資金は立どころに成立せん抑紙幣兌換の準備は從來流通高の四分の一乃至五分の一を置くの習慣あれば二三億圓の紙幣を發行するに六七千萬圓を備ふれば足れり我邦中興以來の發達と今日戰勝の餘威とを併有し且三億の償金實收の餘を受くる數年後の國民は國家富強の名實を完全せんが爲めに六七千萬圓の臨時徵收に辟易することあらんや學人固より此論の今日に實行せられんことを跋望すと雖も己むを得ざれば五年十年を待たんとす豈に空論を唱へんや

客曰く噫然らば是れ善論に非らず反りて惡論となりん學人は一國に公忠にして一身に不忠と謂ふべし若し此論果

して實行せらるゝの餘地あらんか一二部の當局者にして勢力を失墜する者多からん其未派は必ず私憤を以て公憤に換へ罵詈譏尙飽かず或は醜毒凶刃を挾んで學人に薄らん嗚呼危哉究竟此論は惡論として止まん而已此草稿燒棄するに如かず

學人曰く人生唯一死有る而已志士仁人決然立つて天下の爲めに其確信する所を斷行す讒謗罵詈何ぞ憂へん醜毒凶刃何ぞ辭せん死は學人が始より期する所苟くも護國經の布教に尺寸の裨益あらんか眇々たる一身何をか惜まん碌碌生を貪るは素望に非るなり萬一天壽以外醜毒凶刃に罹りて遷化せんか幽界篇忽焉として現出し學人が赤誠孤忠は必らず下義人の鐵腸に激し終に上聖明の聰聽を汚し奉るに至らん是れ所謂優曇華開葩の春に逢ふ者にして是時や護國經の精氣は昇りて天に沖し布教の擴充する限涯無からん嗚呼愉快なる哉嗚呼愉快なる哉と案を拍て大呼す其聲高大にして耳底に徹し忽ち醒む時に明治廿八年八月二十六日午前四時乃ち嗽し乃ち沐し南樓に登り軒窓を放ちて夢中の問答を追記し以て現世篇の善惡第十二に充つ

護國經現世篇卷之一終

護國經現世篇卷之一小引

天道ハ是耶非耶宇宙ノ間風土温冷最モ人體ニ可ナル我日本ニ生ヲ享ケタルハ幸、北越邊陲ノ貧士カ蝸廬ニ誕シテ慈母病篤シ獨リ古稀ノ老祖母カ恩愛ニ露命ヲ寄セ夭死セス幸、齡甫メテ十考妣既ニ去リ蝸廬燒ケ祖母逝キテ餓死セス幸、垢ヲ含ムテ人奴ト爲リ眼疾胸病省スルニ暇アラス僅ニ衣シ僅ニ食シ病死セス幸、艱難辛苦裘葛十タヒ回ル療セサルニ眼疾愈ヘ藥セサルニ胸病治シ幹軀五尺ヲ超ヘ自ラ顧ミレハ武ハ以テ匹夫ノ暴ヲ禁シ文ハ以テ當世ノ姦ヲ挫クニ足ル幸、猶此蓬髮蔽履孤影孑々タル一青年親戚ノ援無ク隣保ノ庇無ク郷黨年少ノ屈辱ニ甘シ憤死セス幸、東都ニ遊ヒ官舖ニ沈淪シ卑汚ニ交リ拙陋ニ接シ二十星霜ヲ閱シテ慚死セス幸、頃日知己漸ク加リ居常徒爾ナラス大都ノ中央莊重ナル家屋ト壯麗ナル庭園トヲ合セテ偶然其主公ト爲ル幸、八幸五死交錯纏綿茲ニ四十有三年遑々トシテ一身健在ス待

ツ所有ル者ノ如シ嗚呼天道ハ是耶非耶竊ニ惟フ飽食暖衣醉生夢死徒ニ生涯ヲ終始センハ素養ヲ去ルコト甚々遠シ八幸豈ニ八不幸ナル無カラシヤ何ノ故ニ五死ヲ免レタル蓋シ余ノ逢遇ハ獨リ殊異有リテ存セル乎曾テ逆境ニ立タント欲シテ順境ニ入り平坦ヲ歩セントシテ險隘ニ迷ヒ通達ノ階梯ハ否塞ノ事實ニ變シ凶兆發シテ吉慶生リ憂無キニ似テ大憂胸間ヲ脫離セス昔時武邊ニ志シ郷試ニ擧ラレテ疾病ノ故ニ機ヲ失シ文名ヲ成サント東遊シ學資ノ稀乏ニ妨碍セラル終ニ自ラ知ラス金融社會ニ陥タリ抑我邦俊傑ノ鮮キハ金融社會ヲ以テ第一トス而シテ余ハ進ンデ武ニ出テス退キテ文ニ入ラス横ニ此社會ニ投セララル然ラハ則チ天意知ル可シ且先考政溫君安政中護國經(幽界篇)ヲ著シテ曰ク數十年ヲ經テ之ヲ世ニ問ヘト乃チ小匱ニ藏メテ存置セリ曩日祝融ノ災スルヤ匱ト共ニ原經烏有ニ歸ス不肖童孩ノ時教ヲ受ケテ要領ヲ得タリ故ニ先考豫言ノ期至ラハ之ヲ

述ヘテ世ニ出サント念フヤ久シ時ナル哉我
 邦ノ財政ハ今ヤ安危ノ街ニ彷徨ス爰ニ原經
 ノ眞理ニ因リ大慈大悲ノ方便ヲ揮ヒ先ツ現
 世篇ノ一端ヲ言説シ微軀ヲ捧ケテ犧牲ト爲
 シ以テ世ノ向背ヲ試ミムトス此宗旨ニ歸依
 スル輩ハ朝ニ神ニ佞拜スルノ勞無ク夕ニ佛
 ニ誦念スルノ煩無シ長ヘニ本業ニ勤勉シ餘
 力ノ應分ヲ國家ニ盡サハ足ラン獨リ是レ而
 已必ラス現世ハ國強ク家富ミ身健ニシテ幸
 福圓滿來世ハ即チ安樂淨土疑莫ラン嗚呼善
 男善女ヨ主人自ラ時ニ佳肴ノ前綠酒ヲ金杯
 ニ啣ミ紅灯ノ下管絃ヲ艶娃ト弄スルノ跡有
 ルヲ視テ道德高固ナラサル者ト爲シ深ク思
 ハス遠ク察セス直チニ此護國宗門ヲ侮蔑シ
 現篇ヲ輕々ニ看過シテ國家ニ不忠ノ鬼ト爲
 リ了リ八大地獄ニ墮落シテ悔ユルコト勿レ
 ト云爾明治廿八年仲秋冲融亭主人謹誌

明治三十六年九月廿九日印刷
 明治三十六年十月三日發行

非賣品

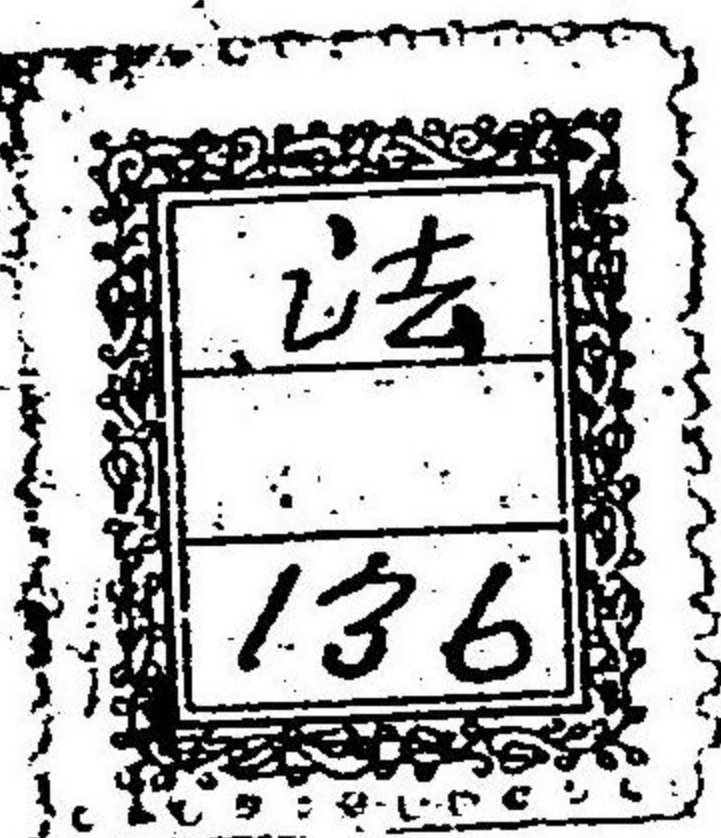
著作兼發行者

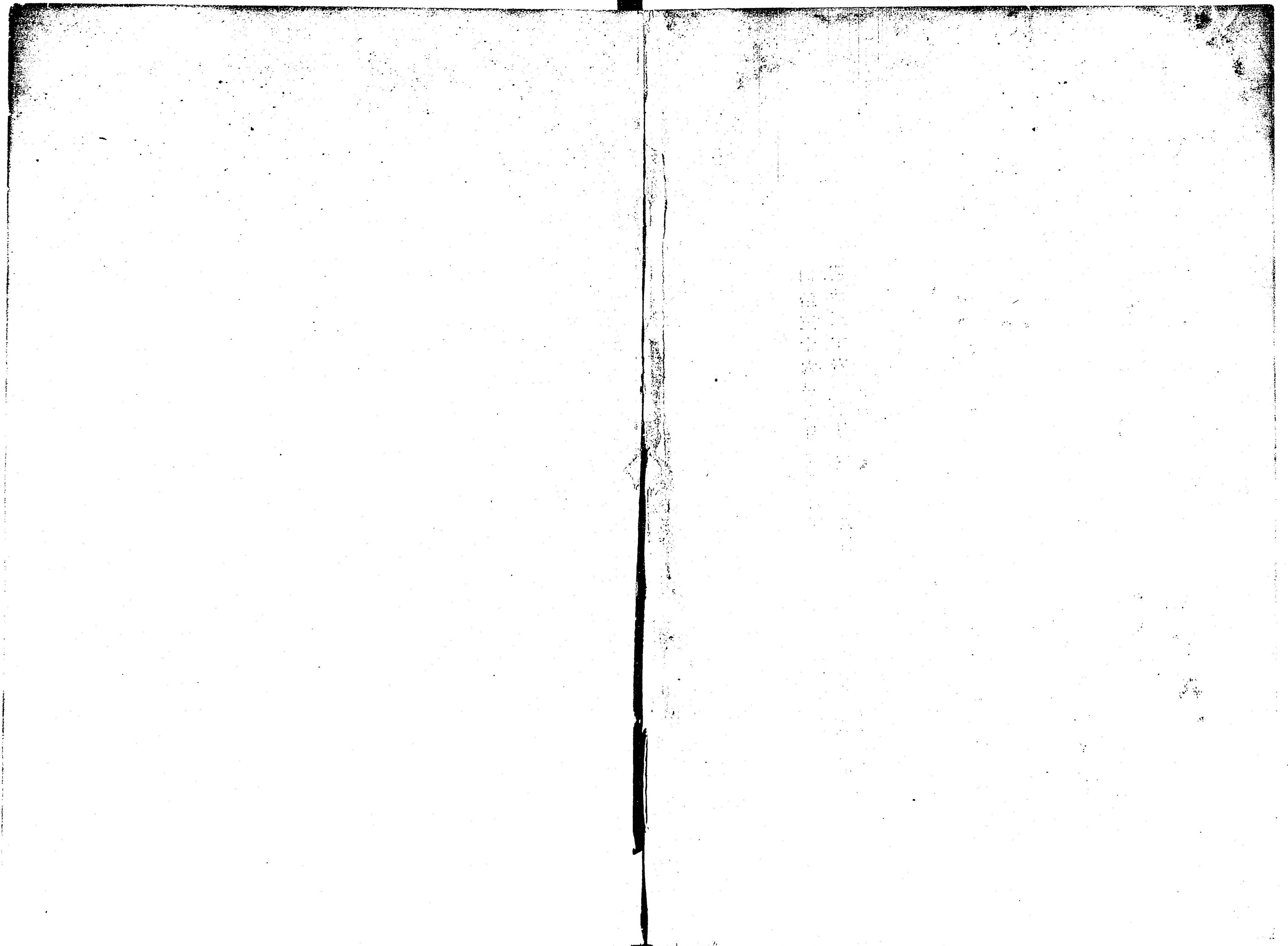
東京府士族
 三輪信次郎

東京市神田區
 裏猿樂町壹番地住

印刷者

中野新右衛門
 東京市神田區
 松住町十一番地





法
136

1

1